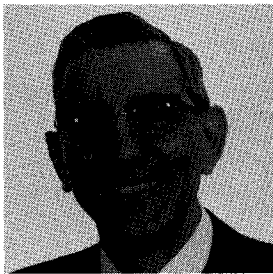


聖徒の道

11 1977





末日聖徒イエス・キリスト教会

1977年 11月号

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイブレー
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト

諮問委員会

ゴードン・B・ヒンクレー
マービン・J・アシュトン
L・トム・ペリー
マリオン・D・ハンクス
ジェームズ・A・カリモア
ロバート・D・ヘイルズ

教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)
キャロル・ラーセン (編集副主幹)
ロジャー・ギリング (デザイナー)

「聖徒の道」

八木沼 修一 (翻訳部長)

も く じ

「隣人を警むる責任あり」	スペンサー・W・キンボール	557
会員の伝道を成功させるための提案	フランクリン・D・リチャーズ	560
伝道活動を容易にするために		563
どのように証するか	スティーブン・R・カビイ	570
あなたも宣教師になれます		573
小さなお友だちへ	ウィリアム・R・ブラッドフォード	574
せんきょうしになろう		576
「わたしのでんどう日記」の作り方		580
たったひとりの人によって	エミリオ・O・ベルヘリ	581
伝道のみたま	ジェイコブ・ディエガー	582
伝道活動は家庭から始まる	アーネスト・エバーハード・ジュニア	584
友人を教会に誘う時の心得	スペンサー・J・コンディ	587
私の生徒	ジャネット・ミラー	589
あなたの教会について話して下さい	ジョージ・D・ドウラント	590
会員の伝道	レアード・ロバーツ	592
ローカル・ニュース		594

聖徒の道 11月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布 5-8-10

印刷所 株式会社 精興社

配 送 東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4-9-19

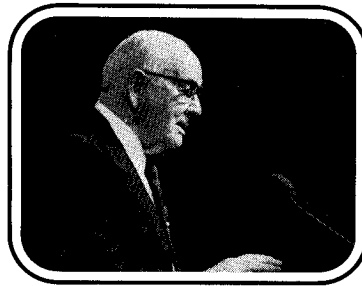
定 価 年間予約1,700円 1部150円
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

「隣人を警むる責任あり」^{いまし}



大管長
スベンサー・W・キンボール

福音に改宗した人はだれも、他の人々に真理を教えるという責任を回避してはならない。人々に真理を教えることは、私たちの特権であり、義務である。これは主の戒めである。ヒーバー・J・グラント大管長は次のように述べている。

「一番大切な第一の戒めは、心を尽くし、勢力を尽くし、思いを尽くし、体力を尽くして主なる私たちの神を愛することである。第二もこれと同様で、自分を愛するように自分の隣人を愛することである。そして、隣人に私たちの愛を示す最もよい方法は、出て行って主イエス・キリストの福音を宣言することである。主は、福音が神より与えられたものであるということを知識としてはっきりと私たちに告げ知らせて下さった。」(Conference Report「大会報告」, 1927年4月, p.176)

数年前、私は「教会員の若い男性はすべて伝道に出るべきでしょうか」という質問を受けたことがある。その時、私は主の言葉を引いて、「ふさわしい男性はすべて出るべきです」と答えた。主は、すべてのふさわしい男性が伝道に出るように望んでおられる。従って自分はふさわしくないと思う人は、ふさわしくなるように今すぐ準備をしなければならない。主は次のように命じておられる。「わが教会の長老たちを遙かに離れたる諸々の国民に遣わし、また海の島々に至らしめ、また外国に遣わして万国の民を訪わしめ、まず異邦人を訪い次にユダヤ人に至らしめよ。」(教義と聖約133:8)

このように、全世界の長老たち、長老に聖任される年齢に達した教会の若い男性は、伝道に出ることをひたすら望み、その準備をする必要がある。現在、教会の若い男性で専任宣教師として奉仕している人の数は、全体の約3分の1にすぎない。3分の1では「すべての若い男性」とは言えない。

また、このように尋ねる人がいるかも知れない。「すべての若い女性も伝道すべきですか。それに父親も母親も。教

会員はすべて伝道しなければなりませんか。」答えは然りである。男性も女性も子供もすべて、すなわち若人も少年少女も皆伝道すべきであると、主は答えておられる。これは、専任宣教師として正式に召しと任命を受けて外国に伝道に行かなければならないという意味ではない。そうではなく、私たちの受けている福音が真実であることを証する責任が、私たち一人一人にあるということである。すべての人に親戚や隣人、友人、職場の仲間がいる。私たちの責任は、模範と教えによって彼らに福音の真理を伝えることである。

「その警めを受けしことあるすべての人はその隣人を警むる責任あり」(教義と聖約88:81)と、聖典にはすべての教会員に伝道する責任のあることがはっきりと述べられている。

この神権時代の予言者たちも、伝道がすべての会員の責任であることをはっきりと教えている。デビッド・O・マッケイ大管長は、その原則を「すべての会員は宣教師である」という、私たちの奮起を促す言葉で説いている。(「大会報告」, 1959年4月, p.122)

同じ神の王国の会員である兄弟姉妹の皆さんが、主から委任を受け、主の使者としてまだ教会員となっていない兄弟姉妹に主のみ言葉を伝えることは、何という胸躍る経験であろう。ここで少しその役割を逆にして、つまりあなたが教会員でなく、現在教会員でないあなたの隣人が末日聖徒であると仮定して考えてみよう。あなたは福音を分かち合って欲しいとは思わないだろうか。また、それまで知らなかった新しい真理を知って喜びはしないだろうか。真理を教えてくれた隣人に対して愛と尊敬の気持ちを抱くようになりはしないだろうか。答えはもちろん然りである。

聖典には、福音が全世界に宣べ伝えられることがはっきりと示されている。救い主は昇天するに先立って弟子たちをオリブ山の頂に連れて行かれた時、このことを強調し、次のように言われた。「あなたがたは……エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人

となるであろう。」(使徒1:8)今日の主の弟子たちも同じ命令を受けている。「地のはてまで」という主のみ言葉は、次の聖句からも確かにすべての大陸に住む人々すなわち全世界の人々を指すものであることがわかる。

「汝は異邦人にわが名を証するのみならず、またユダヤ人にも然すべし。また、世の隅々までもわが言葉を遣わすべし。」(教義と聖約112:4)

確かに主のみ言葉には意味がある。「あらゆる国民」、「あらゆる土地」、「地の果て」、「あらゆる国語の民」、「あらゆる人々」といった言葉は、昔も今もすべての人々を意味する。人類は天父の下におけるひとつの家族であり、私たちはこの家族の一人一人に福音を伝えるようにという戒めを与えられている。

改宗者がいなければ教会は力を失い、滅びてしまうだろう。しかし、教会が伝道活動を行なう最大の理由は、福音を聞き受け入れる機会を世の人々に与えることである。聖典には、福音を教えることに関する戒めと約束、要求と報いが数多く記されている。私がここでことさら戒めという言葉を使ったのは、戒めという言葉が、私たちが逃れることのできない断固とした指示であるように思えるからである。私たち主の教会の会員は皆、伝道活動を行なうだけでなく、この世に住むすべての天父の子供たちに福音を伝えなければならない。これが戒めであることは明白である。

主は、私たちが主のみ言葉を伝える時、主の力が共にあるように求めることができると教えておられる。主は言われた。「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。」そして次の節で、この権威をどのように用いなければならないかについてひとつの事柄を示しておられる。「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、……あなたがたに命じておいたいっさいのことは守るように教えよ。見よ。わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」(マタイ28:18-20)

伝道活動がまさしく主のみ業であるならば、また主の権能によりそれが推し進められるとするならば、なぜ私たちは末日聖徒として人々に福音を宣べ伝えることを恐れたり、ためらったりするのだろうか。

主は予言者エレミヤに言われた。「見よ、わたしは主である、すべて命ある者の神である。わたしにできない事があるだろうか。」(エレミヤ32:27)主は御自分の望む事柄をすべて果たすことができると私は信じている。主は確かに、福音が地上のすべての人々に伝えられることを願っておられる。

主は伝道活動に必要な門戸を開くだけでなく、伝道の業に携わる人々と共にいると述べておられる。この神権時代の初期に、主は十二使徒評議員会会長に次のような約束を下された。この原則は、今日主のみ業に携わるすべての人々に当てはまるものである。

「この故に、彼らの汝を遣わすところへは何所にも出で行くべし。然らばわれ汝と共に在らん。されば、如何なる所にも汝わが名を宣ぶる所には、人々のわが言を受け入れんがため汝に有効なる門戸開かるべし。」(教義と聖約

112:19)

従って、宣教師である私たちは、何も迷うことなく、備えをし、伝道の業に従事しなければならない。福音を教えることに関する限り、開くことのできない扉は世界のどこにもないのである。準備ができていないのに主が門戸を開いて下さる訳はない。私たちに入る備えができた時にはじめて、主はすべての伝道の門戸を開いて下さると、私は思う。そして、その時に私たちが伝道を始めなければ、その責任は私たちにかかってくるであろう。伝道に関してその義務を果たさなければ、義務を果たしていたら救われたかも知れない人々について、神は私たちに責任を負わせられると、私は確信している。

宣教師としての私たちの役割は、福音が真実であることを人々に確信させることが第一ではない。もし主がこの業の神性さを人々に確信させることを第一と考えておられるとしたら、大多数の人が比較的短期間に真理を知ることができるような方法でご自分の権威をお示しになることだろう。その気になれば、主は御自ら言葉を出だし、地上のすべての民は自らの言葉でそれを聞くことだろう。あるいは、空を主のみ言葉で飾り、世界中の人がそれを読むであろう。しかし、このような方法で確信を得た人は、真に生活を良い方向に変え、罪を悔い改めて義にかなった生活をしなければ、前よりも一層悪くなり、聖霊のささやきも感じなくなってしまおう。

主は、主の子供たちにご自分のみ業を確信させることを第一とは考えておられない。主は、彼らが福音に改宗することを望んでおられる。真に福音に改宗した人は、過去の罪深い生活を変え、キリストに従った新しい生活をするようになる。その生活にはまことの「改宗」の姿、すなわち変化がある。古代の使徒パウロは、それを次のように表現している。

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。」(IIコリント5:17)

実際、宣教師はだれをも改宗させない。改宗させるのは聖霊である。人を改宗に導く力は直接に聖霊と交わることによりもたらされる。なぜなら、だれも聖霊の力によらずに真実の改宗をし、イエスがキリストであることを知ることとはできないからである。とはいえ、人の改宗に宣教師と会員は必要欠くべからざる存在である。私たちは福音が真実であるという証を述べなければならない。私たちの証は、人々の改宗に火をつける火花のようなものである。従って当然のことながら、私たちにふたつの責任があることになる。私たちは自分が知っていること、感じていること、また過去に感じたこと、それらを証しなければならない。また、聖霊を伴侶として、力ある生きた言葉を求道者の心に伝えられるような生活をしなければならない。このふたつである。

主は、私たちが福音を分かち合う度合に応じて素晴らしい祝福にあずかることができると約束された。私たちが幕

のかなたから助けを受けるならば、靈的な奇跡が起こるであろう。「誰にても汝らを受け入るる者には、われもまたそこにあらん。そは、われ汝らの前に先立ちて行くべければなり。われは汝らの右に在り、また左に在らん。わが『みたま』は汝らの心の中に在り、またわが天使らは汝らを囲みて懐き支えん。」(教義と聖約84：88)

私たちの罪は、私たちが自らの身と霊をキリストに委ね、確固として世の人々に証を述べる時、一層速やかに赦される、と主は言っておられる。そして私たちは皆、罪の赦しを得るために必要な特別の助けを求めている(教義と聖約84：61参照)。教義と聖約第4章は伝道に関する聖句の中で最も重要なもののひとつであるが、その中で私たちは、「すべからく心をつくし、勢力をつくし、思いをつくし、体力をつくして」主の伝道の業を果たすならば、「終りの日に臨みて神の前に咎なくして立たん」と言われている(2節)。

さらに、主は次のように言っておられる。「而して汝らもし生涯今の世の人々に向けて悔改めを叫ぶことに力を尽し、唯一人の人たりともわれに導かば、わが御父の国に於て彼と共に汝らの喜び如何ばかりぞや。

さて、わが御父の国にわれの許に導きたる唯一人の人に付きて汝らの喜び大いならば、汝らもし多くの人を導き来らばその喜びは果して如何ばかりぞや。」(教義と聖約18：15—16)

私たちの目標は、将来バプテスマを受けて神の王国に入る靈的な備えのできた天父の子供たちをできるだけ早く見いだすことである。その最も良い方法は、あなたの友人、親戚、隣人、知人を早く専任宣教師に紹介することである。長い期間フェローシップする必要もなければ、絶好の時を待つ必要もない。必要なのは、彼らが選民であるかどうかを見分けることである。「わが選民はわが声を聞き、その心を頑固にせざればなり」(教義と聖約29：7)とあるからである。彼らが福音を聞き、福音に心を開くかどうかはすぐにわかる。もし彼らが耳を傾けず、その心が頑固で、疑いを持ったり否定的な意見を述べたりするようであれば、そういう人はまだ準備ができていないのである。しかしその場合も、引き続き彼らに愛を示し、フェローシップの手を差し伸べて、次の機会を待つようにしなさい。そうすれば彼らの友情を失うことなく、一層の尊敬を得るようになるであろう。

もちろん準備ができていないとわかればがっかりする。しかし、だからと言って何もかも永久に失ってしまうわけではない。宣教師の訪問を断わったというだけで友人を失う人はだれもない。教会員であれば、それまでの友情や特別な関係に対して何の恐れもなく交わりを続けていくことができるはずである。人によっては教会に入るのに他の人よりも時間がかかる場合がある。その場合も、教会員はフェローシップを続け、後日再び機会を捉えるようにしななければならない。進歩が見られないからといって気落ちしてはいけない。数多くの逸話が忍耐することの価値を教えている。

現在、一部の地域において教会員の伝道が著しい成功を収めている。彼らは福音を聞く準備のできた多くの家族を宣教師に紹介し、自分の家庭や相手の家庭で福音のレッスンが行なえるようにしている。その結果、宣教師は朝から晩までそれらの家族に教え、働きかけ、彼らをバプテスマに導くのに多忙をきわめている。

効果的な伝道活動の理想の姿は、教会員が求道者を見だし、専任宣教師が教えることである。この方法をとれば、従来の伝道に関する多くの問題は解決するであろう。会員が求道者を見つけ、一人一人がフェローシップに関心を持つならば、途中で来なくなる求道者はほとんどいないし、またそのような会員の愛を受けてバプテスマを受けた人は、後々も積極的に主のみ業に参加する。このように会員が主体となって伝道した場合のもうひとつの利点は、たとえまたまの交流ではあっても、モルモンが特別な健康法を持っていること、日曜日は教会で過ごし魚釣りやゴルフには出かけないこと、さらには教会のプログラムに対して喜んで寄与していることを、求道者がいち早く感じることである。(知恵の言葉や安息日を聖く守ること、什分の一や断食献金、予算、建築資金、宣教師資金などを納めることを教えられても驚かないし、容易に納得できる。)

教会員は家族全員を照会するように努力しなければならない。宣教師はひとりの人でも教えるが、しかし彼らは家族全員を教会に導くため特別に遣わされているのである。家族は個人よりもはるかに強い。家族の中にひとりでも強い人がいれば、その人は家族全員が教会活動にいつでも積極的に参加するよう助けることができるし、家族のだれかが怠慢になった時解決の手を差し伸べることもできる。

私たちは、ステーキ部宣教師と専任宣教師が完全に一致協力し、また教会員が広く御父の他の子供たちに福音の門戸を開くように願っている。そのための主たる方法は、教会の組織とプログラムを伝道活動のために利用することである。神権および各補助組織の役員、教師、ならびに会員は、自らの組織の秩序を保ち、まさしく山の上の光となって、全世界にその光を輝かすようにしなければならない。神権コーリレーションの下で伝道活動を行なうことの必要性は、いくら強調しても足りない。会員からフェローシップを受け、教会プログラムに結びついた求道者は、容易に積極的で忠実な会員になるからである。またもうひとつの方法は、教会員全員が新しく教会に入った人のフェローシップを行ない、友となり、また彼らを励ますことによって伝道活動に絶えず積極的に従事することである。

最後に、予言者ジョセフ・スミス言葉を引用してまとめたい。「神の真理はあらゆる大陸を貫き、……あらゆる耳に響きわたるまで、すなわち神の目的の成就するまで堂々と進み行くであろう。」(*History of the Church*「教会歴史」4：540)また、次のような重要な啓示がある。「誠にその声はこの地より出で行きて、全世界と世のあらゆる隅隅までも及ばざるべからず。すなわち、わが福音はあらゆる人々に説き教えられざるべからず。」(教義と聖約58：64)

会員の伝道を 成功させるための提案



七十人第一定員会会長
フランクリン・D・リチャーズ長老との対話より

リチャーズ長老：伝道活動は、人々に幸福をもたらす非常に大切なプログラムです。私たちは人々に福音を分かち合おうとする時に、自分自身の生活に喜びを見だし、またすべての事柄に適切な優先順位をつけることができます。主が言われたように、私たちにはそれぞれ、他の人々が主を見いだせるように助けるといふ生涯の仕事が与えられているのです。

聖徒たちに私たちの目的は何でしょうかと尋ねると、ある人は福音を全世界に宣べ伝えることだと言います。またある人はモルモン経をあらゆる家庭に置くことだと言います。また、世の人々に警告することだと言う人もいます。このようにいろいろな返事が返ってきますが、つまるところ、「改宗者のバプテスマ」ということです。これが私たちの目的なのです。ですから、何であろうと、その目的に向かっている事柄はみな価値があるわけです。

「では教会員はどのような方法で、そのようなバプテスマに貢献できるでしょうか？」

リチャーズ長老：会員が伝道する容易な方法には3つあると思います。まず第一に、聖句にあるように、人々があなたの善い行ないを見ることのできるようにあなたの光を輝かすことです。福音の原則に従って生活している会員の善い行ないを見て教会に入る人が、毎年、何万人もいます。しかし、他の事柄に気をとられていて、教会には関心もなければ、入りもしないといった人々も大勢います。第二の方法は、私たちが黄金の質問と呼んでいる質問をすることです。「モルモンについて何か御存知ですか」と尋ね、相手の返答次第で、「もっと知りたいとお思いですか」と聞きます。第三の方法は、友人や近所の人々を教会の集会や活動に誘うことです。

「一部の教会員は人に福音を学ぶ機会を与えることに積極的ではありませんが、それはなぜでしょうか？」

リチャーズ長老：相手の心を傷つけるのではないかと恐れているか、信仰が弱いかのどちらかです。あるいは、その両方かも知れません。けれども、こうした状態は悲しいことです。「わが選民はわが声聞き、その心を頑固にせざればなり」(教義と聖約29:7)と主はおっしゃっているからです。私たちの務めは、教会員でない人々を皆教会に連れ

てくることではないと思います。選民を集めるだけです。それでは、どうすれば選民であることがわかるかと言うこととなりますが、主がおっしゃっているように、選民は主の声を聞き、何らかの行動をとるはずで、ある人は、今「選民」ではないかもしれませんが。また、これから1年後にも「選民」ではないかもしれませんが。しかし生涯のある時期に、彼は心を改め、選民になる可能性があります。こういうわけで、私たちは生涯、休みなく、主の声を聞く機会を人々に与え続けるのです。ほかに何か私たちにできることがあるのでしょうか。主は私たち全員に、数多くの機会を与えて下さってはいないでしょうか。私たちは成長して主のようになるならば、人々に対して主と同じ思いを抱くことでしょう。ですから、主より与えられた責任を果たそうと決意し、主の言葉を素直に受け取るようにして下さい。そうすれば主は道を開いて下さるでしょう。そうすることが大切であり、基本であり、成功への鍵なのです。

1年前に飛行機でアイオワへ向かった時のことです。私の隣の席の乗客は、ユタ州立大学の若い学生でした。そこで彼に、学校はどうですかと尋ねると、「大好きです」という返事でした。そのわけを尋ねると、学生たちが良いからということなのです。私は彼の名前と住所を尋ね、ふたりの若い宣教師を送ってもよいかどうか聞きました。それから6ヵ月後、私は宣教師から手紙を受け取りました。彼と両親と、その他に3人の家族がその週にバプテスマを受けたとのことでした。

また、数ヵ月前に、私は空港でひとりの人と話をする機会がありました。私は彼のことを尋ね、次に自分のことを話した後に、「モルモン宣教師になったような気がします。ところで、モルモン教会についてお知りになりたいでしょう」と言いました。すると彼は知りたいとのことでした。そこで私は彼の名前と住所を聞き、ふたりの教会員を訪問させてもよいかどうか尋ねました。それから3、4週間後、素晴らしい経験を綴った手紙が私のもとに届きました。

私は、主が多くの選民を私たちの歩む道に置き、私たちに近づけて下さると考えています。そして、その人と真理の橋渡しをするのは私たちなのです。

伝道するには時があります。何人もの人々が居合わせ、

多忙をきわめている所で福音についてもっと知りたいかどうか尋ねても、効果はありません。ひとりである時に話しかけるようにして下さい。その時に、堅い信仰をもって笑顔で話しかけるならば、かなりの人々がそれに応えることでしょう。そのようにすれば、だれでも2、3ヵ月毎に少なくともひとりには宣教師に紹介できると思います。

「福音を分かち合いたいという気持ちの強い会員もいれば、そうでない会員もいます。そのような気持ちを持つにはどうすればよいか、助言をいただけますか？」

リチャーズ長老：この種の質問をよく受けます。このような気持ちを持つためには、毎週、また必要であればもっと頻繁に、ジョセフ・スミスの証を読むことです。その証は、「高価なる真珠」にあります。この証を読むならば、回復された業に対する強い気持ちを抱けます。このことを私は約束します。ジョセフ・スミスの証は私たちのメッセージの中軸をなすものです。天は確かに開き、父なる神とその御子は予言者ジョセフ・スミスを訪れました。そして、主のみ手の器である彼を通して、完全な福音が回復され、また神のみ名によって行なう権威が回復され、教会が再び建てられたのです。その結果、私たちには今日、教会の頭として立つ予言者がいます。これが私たちのメッセージです。私たちはこのメッセージを本当に理解すれば、進んでこれを人々に話したいと思うことでしょう。私は周囲の人々にジョセフ・スミスの証のパンフレットを渡すのが大好きです。私はまず自分で読み、それから人々に渡すようにしています。これは話のきっかけをつくるとても良い機会です。「生涯の伝道の召しを立派に果たすための方法はほかにもありますか？」

リチャーズ長老：確かにあります。見つけ、教えることは、改宗者を得る過程のひとつに過ぎません。もうひとつ非常に大切なのは、教える宣教師と協力して求道者に働きかけることです。特に、働きかけるという言葉を強調したいと思います。関心を示している人々に働きかける時間をもっと取れば、もっと大きな効果を上げることができると確信しています。すべての改宗にはふたつの面があります。ひとつは教義的な面(これは普通、宣教師が与えます)、もうひとつはフェローシップです。後者は教会員の示す愛です。

教会に入った人々のほとんどは、生活の場所が変わってきます。人々には友だちが必要ですし、私たちが皆、友だちを必要としています。ですから、新しく教会に入った人々は、生活も一部かわり、友だちも幾分か変わってきますので、心からのフェローシップによる社交面、情緒面の支えが必要です。また、生涯楽しい交際が持てることをその心に感じさせることが大切です。これはすべての会員にできることです。そのために、ワード部伝道主任は、宣教師や補助組織指導者、ならびに会員と早急に調整を図る必要があります。

例えば、宣教師が今夜、子供がふたりいるジョーンズ家族に教えるとします。そうしたら、翌日は宣教師に頼んで、扶助協会の姉妹をふたりその家庭に連れて行ってもらいま

す。それはこれから1ヵ月の間、彼女たちがジョーンズ夫人に働きかけ、彼女を扶助協会の集会に招くことができるようにするためです。またその翌日は宣教師に頼んで、初等協会のだれかを連れて行ってもらい、初等協会のことを説明し、子供たちを集会に招くようにします。さらに翌日、宣教師はその家庭を訪れ、十代の子供を青少年の夕べに招きます。

ジョージア州サバンナの教会の支部を訪問した数年前のことを思い出します。私たち夫婦は、扶助協会の食事会に招かれました。「素晴らしい扶助協会ですね。一体サバンナ支部には何人の会員がいるのですか」と私は尋ねました。すると、「そうですね、姉妹は40人ほどです」との会長の返事でした。「でも今朝は40人以上いらっしゃいますね」と言うと、「はい。今朝の出席者は84人です」という返事でした。

求道者と会員の友だちが大勢出席していたのです。すべて教会員が「働きかけ」、フェローシップしていたのでした。フェロー SHIPPING は、家族の一部しか会員ではない家庭に対して特に効果的です。

ステーキ部には、平均して450人の長老見込み会員がいます。そして約60パーセントが既婚者で、奥さんは教会員ではありません。つまり、約300人は教会員ではないということになります。そのほかに、教会員でない御主人を持つ姉妹も大勢います。その数は大体150人です。言い換えれば、家族の一部しか会員ではない家庭が450軒あることになります。それに子供を加えると、もう100人増えます。つまり専任宣教師とステーキ部宣教師が教え、家族の一致をもたらし、神殿に入れるように助けなければならない人々がこれほどいるということです。

私はグループで教えることの効果は大きいと信じています。しかし、これら450人とその配偶者を無作為にグループ分けはしません。そのためによく考え、祈り、幾つかに組分けします。若い夫婦、中年の夫婦、老年の夫婦に分け、さらに細分化します。けれども年代に分けたからと言って、同年代の人ばかりに関心があるというわけではありません。受けた教育や職業、また関心事等も考慮してはどうでしょうか。よく祈ってこれらの家族を相似かよったグループに分けて教えるようにすると、素晴らしい成果を上げることができます。

私はこの伝道方法の成功例を知っています。そのステーキ部では、ステーキ部長会あるいは高等評議員が訪問して、「兄弟、私はあなたが教会に活発でないのを知っています。それで、あなたのような兄弟たちとその奥さんに来ていただいて、一緒に話し合いたいんです。これこれの時間においていただけますか」と呼びかけました。すると大勢の人人がこの招待を受け入れ、拒否した人は比較的少数でした。これらの人は、霊的に死んでいた人々です。聞いたところによると、彼らの多くは、「このように招かれて話し合ったのは、ここ10年来初めてです」と語ったということです。

この集いの後、夫婦をそのグループと密接な関係に保つようにします。家族の一部しか教会員ではない家族の場合、会員の助けが是非とも必要です。社交とフレンドシップ

グが必要になります。宣教師のレッスンを受けている場合は、次のようにすると非常に効果があります。(a)毎日その家族のために何かをする。(b)教会の集会や社交活動に連れて行く。今週実行する！(c)求道者の家族の場合、最初の数週間に、宣教師と相互調整を図って補助組織の指導者が訪問する。家族に教会員がいる場合、ホームティーチャーと相互に調整を図って、補助組織役員と教師が訪問をする。(d)ワード部会員との適当な活動を手配する。(e)その家族をバプテスマ会へ連れて行く。(f)家庭の夕べを準備する。状況に応じて、他の家族と合同で行なう。(g)教会の集会予定表とパンフレットを渡す。必ずしも全部を一度に渡す必要はない。(h)知恵の言葉の問題を克服するのに役立つ助言を与える。(i)一緒に断食をし、祈る。(j)家族に教会員がいる場合、監督と一緒に訪問する。監督には人を改宗に導く力がある。「教会員でない配偶者のためにしばしば涙を流し、改宗の希望を持って祈り続けてきた人々が大勢いますが、何か助言を与えて下さいませんか？」

リチャーズ長老：そのような兄弟姉妹たちは、自分の生活に福音の大きな影響力を反映させるようにして下さい。そして、より良い親となり、思慮深く明かかい伴侶となることです。これが私の助言です。

兄弟姉妹たちは、できるだけ多く、福音の教えを家庭に生かし、その影響力を子供たちの生活に反映させることです。

できれば、立派な感化力のある人、教会とその教えに人人の心を向けさせることのできる人を友だちとします。

強いることなく、福音を教える機会をつくるようにします。レッスンを受けるグループの一員となれば、最も効果的でしょう。また、グループの中に、同じような状況の下にある人々がいれば、特に助けとなるでしょう。

決してアウトサイダーのように感じさせてはなりません。教会員である配偶者とその子供たちは、教会員でない配偶者に、家族の一致が大切であることを感じさせるようにし、家族はあらゆる点で「ひとつ」でなければならないという堅い信念を保つようにします。

とりわけ、自分にできるすべての事柄を行なったら、天父から大きな助けが与えられるということを心に留めて下さい。そして絶えず祈り、耐え忍んで下さい。

けれどもあなたの伴侶には助けが必要です。ここでは、フェローシップが欠かせない要素となります。ところが、ステーキ部やワード部の指導者の中には、フェローシップの重要性を十分に理解していない人々がいるように思われます。すべての会員が実際に貢献できる場はここにあることを、私は申し上げておきます。

しかし、だれかがあなたのもとにフェローシップを求めてくるのを、ただじっと座って待っていることは許されません。人生はそのようなものではないからです。どこへでも出かけて行き、援助を申し出、いつでも心を配るようにしなければなりません。主が私たちに聖霊を与えて下さっている理由のひとつはそのためです。自分のみならず、他の人々にも祝福をもたらす機会をよく注意して見つけるこ

とです。

私はコロラド州に近いユタ州のバーナルで、5人の家族の改宗を手伝った姉妹にお会いしました。彼女は食料品店で買い物をしていて、食料品をあれこれと捜していたひとりの女性に会ったそうです。彼女は「お手伝いしましょうか」と声をかけました。そうして手伝った後、その女性が旅行の途中であることを知りました。夫婦でコロラドへ行き、仕事を捜すつもりだとのことでした。そこで姉妹は、「なぜここで捜しにならないんですか」と尋ねました。

すると、「捜すあてがないんです」という返事でした。

するとこの善意ある姉妹は、「それじゃあ、お手伝いしますわ。買ったものを持って、私たちの家においで下さいな。あなたの御主人が仕事に就けるように手伝って下さる方々に御紹介しますわ」と、自分の家にその夫婦を招きました。

それから姉妹は方々に電話をかけ、1、2時間後には、幾つかの面接の手はずを整えたのでした。こうして食料品店で知り合った女性の御主人はその中のひとつを選び、牧場で働くことになりました。

この良きサマリヤ人はそこで手を引いたでしょうか。決してそうではありませんでした。5人の家族の泊まる所がなかったことから、彼女はその後、彼らに宿を提供しました。こうして彼らは、幸せな家庭生活と、食事の祝福、夜と朝の家族の祈り、そのほかにいろいろなものを目にしたのでした。この夫婦と3人の子供たちは心から感謝すると共に、この姉妹とその家族に深い関心を持ちました。彼らの住まいが決まった後、彼女はどのように自分たちがこのような生活をしているのか、彼らに話したいと思いました。そこで1週間後、彼女はこの家庭に宣教師を連れて行きました。その結果、この家族はバプテスマを受け、喜んで教会に入ったのでした。こうしてこの善意ある姉妹と会員たちは、その社会に彼らの住む場所を与えたのです。

改宗で最も困難なのは、求道者の気持ちを理解することです。古い友だちを離れ、新しい人生を歩んでいる孤独な求道者の気持ちを理解することです。しかしすべての会員にはそれができません。求道者が教会を見だし、新しい友だちと知り合えるように、また福音を求めている人々を健全な社交活動や集会、スポーツ行事に招くために、会員は自分の殻を出て手を差し伸べる必要があります。また求道者は一般に、自分が新来者でよそ者であるということで打ち解けない気持ちを感じています。これが、グループによるレッスンを推奨するもうひとつの理由です。幾人かと一緒に教えることによって、私たちは新たなフレンドシップの枠を広げることができます。教会員でない配偶者のグループと一緒に教会の教えを学ぶ時、多くの素晴らしい出来事が起こっています。また、彼らが話し合い、学び合い、気持ちを分かち合い、教会員の配偶者が自分の生活についての適切な証を述べる時、彼らはみたまによって心を動かされ、素晴らしい真理を見いだすのです。このことは確かです。私はこれまでにそのような情景を目にし、耳にしてきました。

伝道活動を容易にするために

すべての会員が容易に伝道できるようにするために、教会には多くの素晴らしいプログラムがある。

「すべての会員は宣教師である」という言葉を耳にし、また、伝道活動の「歩みを速めなさい」という勧告を思い起こす度に、多くの人々に不思議なことが起こります。

敵がい心をあらわにして罵声を浴びせる人々を前に、街頭に用意した台の上に立って、主の道に従うよう、何の成果も期待できないままに呼びかけを続ける自分の姿が心に浮かんでくるのです。あるいは、牧師の一团を相手に助け手もなくひとりで福音の原則を論じ合う自分、またチラシの束を手にして戸別訪問する先々であるいは行きずりの人への街頭伝道で非礼な言葉をもってすげなく断られる自分の姿が浮かんでくることもあるでしょう。また、変わり者だと思わせるような行動をしたり、親しみを感じさせないような態度をとって隣り人をつまずかせる自分自身の姿が心に浮かぶかも知れません。

こうした心の思いが、多くの場合、私たちが伝道活動から遠ざけていることは言うまでもありません。これは、伝道の業が真実であることを疑ったり、予言者である大管長が道理に合わないことや不可能なことを強いていると思うことは全く別の問題です。私たちは時々憶病になって、自分ひとりの力ではどうにもならないと思うことがあります。そして伝道活動とはやっかいなものだという気持ちになると、時間をつぶすためにほかの活動に重きを置くようになって、自ら伝道の機会を逃してしまうのです。

しかしこれは私たちの取るべき態度ではありません。いや、断じて取ってはならないのです。

すべての人が活発に伝道活動に携わる必要のあることは事実です。しかし、個性や考え、環境、人から受ける感化が様々であるように、伝道の方法もいろいろと違いがあるものです。福音に従って生活し、その福音を人々の間に広める助けをすることは、楽しいものです。そして教会が真実私たちに求めていること（私たちがみな専任宣教師にならなくてはいけないということではない）がわかれば、宣教師になるということにそれほど恐れを感じなくなるでしょう。それどころか、どのようにすれば自分も活発に伝道できるかたちどころに理解することができるかも知れません。

次ページ以後に説明されているプログラムは、これまでの伝道活動を通じて展開されてきたものです。これらのプログラムはだれにでもできます。しかしほんの一部に過ぎません。どれもみなすべての会員が宣教師としての務めを果たすのに容易に役立つことのできるものです。よく研究してみてください。多分あなたは、自分に最も合った方法で伝道活動を行なう、今までとは違った宣教師としての自分の姿を心に描くようになることでしょう。

特別な家庭の夕べ

末日聖徒の実生活を紹介することはよい伝道の手段である



一般に人は、説教で福音を説かれるよりも、教会員の幸福な生活を実際に自分の目で見る方が、もっと福音について聞きたいという気持ちを抱くようになるものです。

家庭の夕べを伝道的手段として用いる理由はここにあるのです。決して性急にならず、家庭の中に、福音の教えがごく自然に生かされている様子を、友人や隣人にじっくりと見てもらう機会を作って下さい。説くよりも見てもらうことです。

教会員でない人を招待して家庭の夕べを開く場合に、準備が不十分だと、また伝道しようとする姿勢をあわただしくあからさまに前面に打ち出すと、効果は期待できません。十分な準備をする必要があります。友情が深まり、福音の教え方も上手になった時点でごく自然に家庭の夕べに招待するようにしましょう。それには以下のような手順を踏むとよいでしょう。

1. 友人や知人の中で親しくしたいと思う家族を決める。
2. 家族同士で外出したり、趣味や才能を分かち合ったり、そのほか一緒に楽しめる活動をいろいろ行なって、互いによく知り合う。
3. 適切な時に（よく気をつけていれば、その時がわかる）、月曜日以外の夜にその家族を招待して特別な家庭の夕べ

べを開く。

4. それ以後も、一緒に活動するようにするとよい。こうして彼らが、あなたの家族の幸せな理由を知りたいという気持ちを起こしてくれば、多くの機会を捕えて福音を紹介することができる。

この種の計画を実施する上で何よりも大切なことは、真心からの友情と、自分にとって最も大切なものを分かち合いたいという望みを持つことです。これは非常に大切なことです。あらゆる面であなたの動機が誠実さを欠いている場合は、成功しません。あなたの行なうことが陰謀のようになってしまいます。家族の伝道活動を行なう場合、見せかけだけであったり、偽りであったり、「かたくな」であったりするとほとんどの場合失敗してしまいます。自然に振る舞い、一瞬一瞬に喜びを持つことです。

会員でない人々を招いて行なう特別な家庭の夕べでは、どのような活動が最も適当でしょうか。それは、あなたの興味ある事柄と、相手の家族の関心事や生活様式に大きく左右されます。ですから、よく祈り、心をとぎすまし、創意工夫を凝らすようにしましょう。ただし、決して不自然にならないようにします。あなたの家族についてよく知ってもらうための活動をしてはどうでしょうか。庭でバーベキューなどをしてもよいでしょう。また、最初は娯楽的な映画やフィルムストリップを見せることにして、福音に関するものは後日にまわしたほうがよいかも知れません。

家庭の夕べのプログラムを作っておくとよいでしょう。そうすれば、招待された家族は、あなたの家で行なう家庭の夕べと、居間でテレビを見ながら漫然と過ごす夕べとの間には違いがあることをはっきりと知ることができます。家庭の夕べのプログラムの一例を以下に挙げます。

1. 開会の祈り
2. 楽しい歌
3. 正直や奉仕といったテーマの短いレッスン。あるいはタレントショーや話し合い
4. ゲーム
5. 閉会の祈り
6. リフレッシュメント

この場合大切なことは、家庭の夕べは家族全員で過ごす素晴らしい一時であることを強調することです。家庭の夕べは、打ち解けた雰囲気と一緒に過ごし、家族の関係や家族の責任、家族の問題、家族の計画などについて話し合う時間です。

この特別な家庭の夕べを通して、福音が家族に大きな影響を及ぼしていることと、福音がなければ今のあなたの家族が味わっている幸福はないことを、招待した家族にはっきりと理解させなければなりません。次に、招待した家族に家庭の夕べのテキストをプレゼントします。彼らはそのテキストによって家庭の夕べをどのように始めたらよいかを知ることができるでしょう。

それではどのような人を家庭の夕べに招いたらよいでしょうか。招待を受け入れそうな人を選ぶことは楽しいこと

です。福音を受け入れる見込みのある人々は、隣人に限らず大勢います。次の人々はどうでしょうか。

教会員でない親戚

職場の知人

子供の友だちの家族

教会についてあなたに質問をしたことのある人

近所に引っ越してきたばかりの家族

教会の集会に来たことのある人

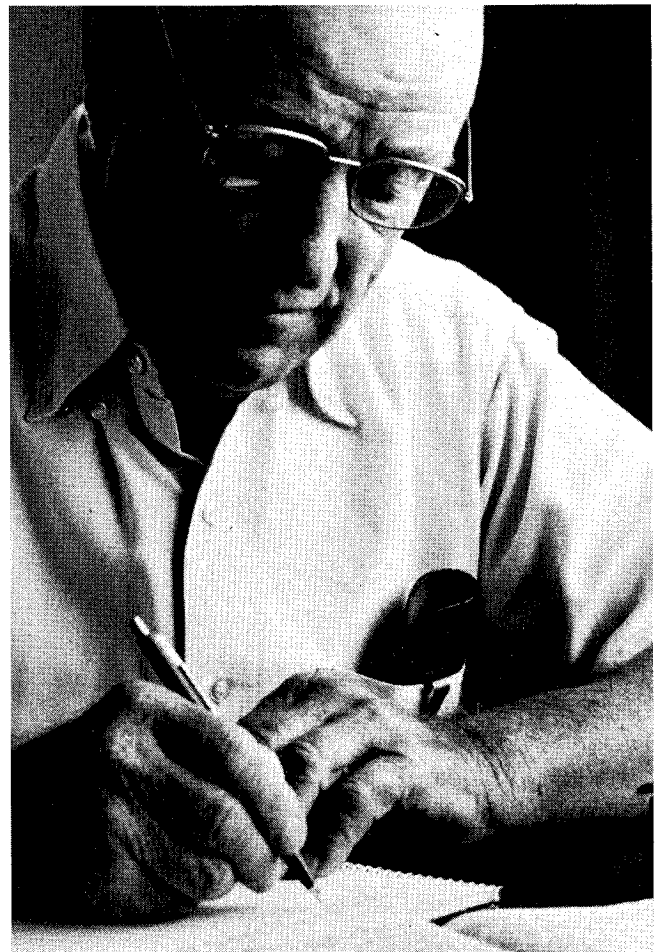
旧友

よくあなたの家を訪れる人

対象となる人々には限りがありません。あなたの家族も伝道活動に携わることができます。特別な家庭の夕べを開いて他の人々に愛の手を差し伸べることによって、あなたの家族は全員で「伝道する」ことができるのです。そしてその家庭の夕べで、あなた方のありのままの姿、喜び、幸せ、それに福音に従うことからもたらされる平安と安心感を分かち合うのです。

モルモン経の寄贈

家族が参加するモルモン経プログラム



2年前に、東南アジアに住むひとりの少女に、香港伝道部から一冊のモルモン経が送られました。その本には、ソルトレーク・シティーに住むひとり女性の写真と、モルモン経に対する彼女の証の書かれたカードがはさんでありました。このプレゼントに感激した少女は、モルモン経を全部読み通しました。

それから間もなくして、ソルトレークの姉妹は、この少女から手紙を受け取りました。その手紙は、少女が初めて英語で書いた手紙でした。そこには彼女を含めて彼女の家族の10人がバプテスマを受けてこの教会に入ったことが書かれていました。8歳になっていない残りの2人も、今バプテスマを受ける日を心待ちにしているとのことでした。

この話は、「家族が参加するモルモン経プログラム」によって改宗した一例に過ぎません。ほかにも非常に多くの家族が福音に改宗しています。現在七十人第一定員会は、このプログラムを実施するようにすべての七十人定員会に勧められています。このプログラムの実施方法について、今年度の地区集会の七十人部会でその指導が与えられています。

「家族が参加するモルモン経プログラム」は、モルモン経は効果的に伝道の機会をもたらすという既定の事実に立脚して組まれたプログラムです。モルモン経は、読む人々を福音に改宗させる力を持っているのです。

宣教師になる最も簡単で良い方法は、モルモン経を贈ることである、という理由はここにあります。このプログラムでは、モルモン経を「個性的な」ものにします。すなわち、モルモン経の表紙の裏に、あなたと家族の写真、それに証を書いたカードを貼ってプレゼントするのです。

では、なぜモルモン経を個性的にする必要があるのでしょうか。

それは、モルモン経を手にしながらか、さっと目を通して、それを放り出してしまう人が時々いるからです。その人にとっては、何の関心もない本なのです。モルモン経について何も知らなければ、この書物がそれまで読んだものの中で最も重要な書物であることに気づくことはできません。

しかし、本を開いた時に、実在の家族の写真とこの書物が真実であるという証に加えて、この書物を読むことによってあなたの人生は変わるでしょうという添え書きを目にしたら、その人はモルモン経に対して特別な気持ちを抱くことでしょう。特に知人から写真と証を受けた場合は、モルモン経についてもっとよく吟味し、読みたいという気持ちに駆られるものです。生きた証に触れることによって、この神聖な書物に対する態度が変わるのです。

「家族が参加するモルモン経プログラム」の目的は、(1)教会員の家族に、モルモン経を個性的にアレンジして知人に贈ってもらったり、宣教師の伝道活動に役立てるためにモルモン経を提供してもらったり、また、(2)フレンドシップを行なって、教会員になる見込みのある人々と家族ぐるみにつき合いをするように教会員を促すことです。

では、その方法を御紹介しましょう。まずあなたの家族の写真を用意して、10cm×17cm大のカードの上部にその写

真をのり付けします。そしてあなたや家族の証をその下に書きます。次にワード部伝道主任または七十人会長から、「モルモン経が答える23の質問」(PFFS 0104 JA)と「連絡用紙」(PFFS 0090 JA)(教会ディストリビューション・センターから入手できる)を入手して、写真を貼ったカードと一緒にモルモン経の表紙の裏にはさみます。その際、あなたの宛名を書いた封筒と便箋を添えることも忘れてはなりません。このようにすれば、モルモン経を受け取った人から手紙をもらうことができ、あなたとの文通が始まります。

モルモン経をプレゼントする準備が整ったら、次にいろいろしなければならぬことがあります。まずそのモルモン経を直接友人に渡して、愛の手を差し伸べます。そして後日適切な時に宣教師を紹介するのです。あるいは、準備したモルモン経をワード部伝道主任または七十人会長に渡して、ステーク部あるいは地方部内の専任宣教師とステーク部宣教師が利用できるようにしてもよいでしょう。このようにしてあなたの準備したモルモン経を、あなたの友人に渡してもらいます。あるいは特に希望の相手がない場合は、福音のメッセージに特別な関心を示している求道者にプレゼントしてもらいます。ある伝道部では、その地域のステーク部から26,000冊に及ぶモルモン経の寄贈を受けたということです。そのために、ワード部ごとにひとりの会員に全家族の写真を撮ってもらい、写真の準備が容易にできるようにしたということです。

家族の写真を貼ったカードに家族の証を書くという作業は、家庭の夕べのよい活動になります。これは、「すべての会員は宣教師である」という言葉を現実のものとする最も良い方法のひとつです。そして相手の家族から返信が来たら、再び家庭の夕べにおいて家族全員でその手紙の返事を書くのです。特に間もなく伝道に出る青年や将来の宣教師を目差して励んでいる子供たちに活発に参加させましょう。このように他の家族と触れ合うことによって、あなた自身の家族は大きな影響を受けます。

ある初等協会の教師が、クラスの子供たちに各自の写真を持参させ、カードに証を書かせて、その両方を添えたモルモン経を世界の数カ国に送ったところ、そのうちの一冊を受け取ったオランダの10歳の少女から、次のような返事が届いたそうです。「こんにちは、マイク兄弟、私は末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になりました。」手紙には彼女の家族全員がバプテスマを受けた、と書かれていたそうです。

テンプルスクウェアの訪問者センターで「家族が参加するモルモン経プログラム」を推進しているビル・ブラッドショー兄弟は、7歳の少年の用意したモルモン経にまつわる話をしてくれました。「そのモルモン経には少年のカラー写真が添えてありました。赤毛でそばかすだらけのその少年は、カードからはみ出しそうなほどたくさん証を書いてくれました。そこにはこう書いてありました。『このモルモン経を受けとる人へ：ぼくはあなたにこのモルモン経を

プレゼントします。ぼくはモルモン経が神さまからあたえられた本であることを知っています。おとうさんとおかあさんがぼくによんでくれました。そしてそのことをおしえてくれたからです。ぼくの行っている教会についてわからないことがあったら、おてがみをください。ぼくがおこたえます。』

ある日ひとりの方がいらっしやいましてね、その方に例のモルモン経をお渡ししたんです。そうしましたら、その方は少年の証を読んで涙を流し、こう言っておられました。『是非この本を読ませていただきます』と。』

あなたが贈るモルモン経を通して、人々に主のみたまが働きかけるのです。

また、ある著名な末日聖徒の科学者がある科学者にモルモン経を贈ったことがきっかけとなって、ふたりの間に文通が始まり、やがてその科学者の家族全員がこの教会に改宗したという話もあります。

ユタ州カーンズで開かれているセミナークラスでも、ひとつの計画を実施して、特別製のモルモン経を3,600部寄贈したということです。

また、毎週集まって合同の家庭の夕べを行なっている未亡人のグループも、これまでに述べた方法でモルモン経を何冊か贈りました。すると間もなくたくさんの手紙を受け取り、全員でその返事を書いた結果、今でも文通が続いているということです。

このような成功例が続々と寄せられています。

あなたも家族と協力してこの伝道活動に参加してはいかがでしょう。そうと決まったら早速ワード部伝道主任か七十人会長のところに行って、協力を求めるようにして下さい。

「聖徒の道」を 使った伝道

私たちは時として、伝道活動を行なう人々について、ある種の既定概念を抱いてしまいます。つまり、恐れ知らずで力強く、積極的で社交的な人だけが、気安く街頭伝道をしたり、タクシーの運転手に福音を説いたり、飛行機内で伝道したりすることができると思込んでしまうのです。一方自分とは言えば、クラスで一度も手を挙げたこともなければ、わずか2分半の話でも紅潮してしまうほど億病で消極的なのです。伝道活動を行なうことが大切な義務であることは知っていますが、積極的に行なう自信はありません。それでは、徐々に勇気を増し加えることのできる静かな伝道活動はないのでしょうか。

あります。人の感情を害することなく伝道する方法があります。その目的のひとつは、良い友だち関係をさらに親密にすることです。これは「聖徒の道」を活用して行ないますが、その方法は2通りあります。(1)時に応じてあなた

自身の「聖徒の道」を見せる方法、(2)「聖徒の道」を予約しプレゼントする方法。(このために半年分の「聖徒の道」を予約することができます)

以上の方法はいずれも利点があります。まず第一に、「聖徒の道」を読む人は、自分の教会生活がどうなるか、また人生の問題を解決するに当たって教会がどのような役割を果たすかということについて、正確でしっかりとした展望を持つことができます。また、他人の考えに左右されず、自分自身の目で教会を見ることができます。この場合、「教会についてどう思いますか。宣教師にお会いしたいですか」と他人からせかされずにすみませす。これも大切な点です。

この方法は、だれでも好感を持って受け入れます。この方法によれば、積極的な行動をとる必要はありませんし、出過ぎるという心配もありません。まただれかに恐れを抱かせることもありません。自然に情報や信念を分かち合うことができるからです。必ずと言ってよいほど、教会員でない友人に「聖徒の道」を喜んで受け取ってもらえる大きな理由はここにあります。

「聖徒の道」を渡す場合は、日常の会話にのぼる話題を扱った記事に相手の注意を引き付けるのが一番得策ではないかと思ひます。「聖徒の道」の記事や主題は多彩で、相手に関心を抱いている事柄に的を絞ります。特に特別号は役に立つでしょう。

数ヵ月前のある日のことです。ある教会員が非教会員の仕事仲間からたまたま宗教についての話をもちかけられ、こう尋ねられました。「あなたは今も予言者がいて予言をしているってこと本当に信じているのかい。」

「もちろんだよ。」

「そうか、じゃあその予言者が最近予言したことを話してくれないかい」と彼が言いました。これは必ずしも答えやすい質問ではありません。私たちは指導者から非常にたくさんのお勧めを受けているので、特定の事柄をとっさに思い浮かべることがなかなかむずかしいものです。

ところがこの会員はこのように答えました。「それじゃあ、予言者が最近私たちに語った事柄を掲載した記事を見せてあげよう。」翌日彼は大会特集号のほかに、大管長会のメッセージを掲載した「聖徒の道」を持ってきました。そして大管長の言葉を読んだその人は、非常に深い感動を覚えたということです。

毎月福音を分かち合う

「聖徒の道」を予約してプレゼントすることも、手元の「聖徒の道」をプレゼントするのと同じように簡単です。この場合には利点が増し加わります。つまり、長期にわたって人々に教会の教えに慣れ親しませることができるのです。その間あなたは、手紙を書いたり、話をしたり、相手が心から関心を持っている事柄を敏感に察知することによってフォローアップする必要があります。

親元を離れている家族の一員のために「聖徒の道」を予

約してもよいでしょう。誕生日や結婚式やその他の機会をとらえて贈るとよいと思います。

「聖徒の道」の予約は、友情が深まればほとんど自然にできるものです。ひとりの女性がある友人について語ってくれました。その友人は、いつも静かでありながら強い確信を持って、教会に関するあらゆる疑問に答えていましたが、彼女の質問が絶えないため、彼はやがて「聖徒の道」を持ってきて、特に答えづらい質問にはそれを使って答えるようになりました。また、質問の答えが出ている「聖徒の道」を彼女に貸すこともしばしばでした。彼女はこう言っています。「もちろん借りている間に、全部読みました。ほとんどすべての記事が私に関わりがあるように思えましたし、どれも感動するものばかりでした。」このようなことを何度か行なった後、彼は彼女のために「聖徒の道」をプ



レゼントとして予約し、彼女は毎月それを読むようになったのでした。

教会員でない家庭では、特別な問題が生じた場合に、「聖徒の道」が非常に大きな力を発揮します。一例として、ワシントンステーク部のあるステーク部宣教師から寄せられた報告を御紹介しましょう。「私たちはある教会員から、教会員でない彼の家族にレッスンをしよう依頼を受けました。彼の奥さんは教会員ではありませんが、『エンサイン』（教会で発行している成人向けの英文月刊誌）の特別号を読んで非常に胸を打たれたということでした。彼女は今レッスンを受けており、いずれバプテスマを受けることと思います。」

プレゼント用の「聖徒の道」の予約方法

皆さんには、「聖徒の道」を贈り、もっと教会に対する関心を深めたいと思う友だちが何人かいることでしょうか。その方々のために「聖徒の道」の予約をしてはいかがでしょうか。特に、今後、プレゼント用の予約については1年分以外に、半年分の予約も行なえるようになりました。クリスマスシーズンの近づいた今が最も良い時期だと思います。予約は従来と同じ方法で、ワード部、支部に備えられている予約用紙をお使い下さい。

また、プレゼント用の「聖徒の道」を予約する方のため、特別なギフト用書簡が用意されています。これは教会ディストリビューション・センターから贈り主宛てに送付されますので、贈り主はこれに自分の言葉を書いて贈り先にお送り下さい。「聖徒の道」は教会ディストリビューション・センターから直接に送付されます。

「聖徒の道」を受け取った相手がすぐに教会に関心を示さなくても、長い間には影響を及ぼすことができるものです。宣教師から最初のレッスンを受けてからバプテスマを受けるまでに7年かかった人もいます。その間、彼と教会をつないでいたのは、教会の定期刊行物でした。彼は失意を覚えた時に、その本から力と導きを得ることができたのです。

彼はこう言っています。「私はあまり教会には行きませんが、教会の月刊誌をいつも読んで、そこから生活の支えを得ていました。私が最終的にこの真の教会に改宗するに至ったのに、それが大きな力となったことは確かです。」

日曜学校への招待

その他聖餐会、扶助協会、ミューチャル、
社交活動その他の集会に招く

福音の基礎クラスは、福音を親しみやすく紹介するのに最適のクラスです。

あなたは教会員でない人々と交流している内に、自然の成り行きで彼らを教会に招待する時がやってくることと思

います。

その場合、まず彼らを日曜学校の福音の基礎クラスに招待するとよいでしょう。このクラスは福音を学び始めた人々のために特別に設けられたクラスです。

このクラスは、組織立った伝道活動の一翼を担うもので、「見つける」という段階から「教える」という段階に移行するために設けられた日曜学校の組織です。

ある新会員は、福音の基礎クラスが伝道活動の一環として非常に効果的であることを次のように述べています。

「私は職場で机を並べているひとりの教会員と宗教についてよく話し合ったものでした。私は休憩の度にきまって彼にあれこれ質問しましたが、彼はとても辛抱強い人で、答えがわからなければ、本を持ってきて答えてくれたほどです。

こうして私はあれこれ学びましたが、どうも一本筋が通らないのです。彼はいつもいやな顔ひとつせずに答えてくれましたが、しばらくすると、私は質問することがあまりに多過ぎて何を尋ねればよいのかわからなくなり、混乱し

てしまいました。

するとある日彼がこう言いました。『今度の日曜日に一緒に教会に来てみない？ 日曜学校に出席すれば、僕たちの信じていることがよくわかるようになると思うよ。僕から聞く以上にね。だから何度か続けて来てみない？ そうすれば君の頭の中の知識が必ず整理されると思うから。たとえそれがだめでも、来れば来たなりの価値はあると思うよ。』

そこで私は彼と一緒に日曜学校に行きました。そしていろいろと学ぶことができました。とにかく最初の2回のクラスでは恥のかき通しでした。『ああ、なるほど』、『そうですね、確かにその通りです』を連発したものです。そうするうちに、全体の中にひとつの計画のあることがわかってきました。それはまことに美しい計画でした。そして宣教師からレッスンを受け始めると、ぐんぐん理解が増したように思います。』

福音の基礎クラスは、新会員のための紹介クラスであると共に、再び教会に集うようになった教会員の気持ちを一新するクラスでもあります。同時に、宣教師からレッスン



を受けている人々や、教会に関心を抱いている人々のためのクラスでもあるのです。

福音の基礎クラスは日曜学校のクラスです。ワード部、支部の七十人と相互調整され、組織立った伝道活動の一翼を担って運営されます。できれば七十人の中から教師を召すとよいでしょう。

福音の基礎クラスについて友人に説明する場合は、このクラスが日曜学校のほかの成人クラスと比較してどのような傾向のものであるかを説明するのが一番よいと思います。福音の教義クラスに出席する教会員は、8年間で四大標準聖典を学ぶことになっています。例えば、今年度はモルモン経の前半を学んでおり、来年度はその後半を、そして再来年以降は教義と聖約と教会歴史、高価なる真珠と旧約聖書、および新約聖書を2年間ずつ学びます。つまり聖典をテキストとして福音を学ぶわけです。

しかし、福音の基礎クラスでは、12課にわたって福音の基礎を学びます。このクラスは、本格的な福音の学習に入る前に証を得させることを目的としています。このコースは途中から学んでも差し支えありません。例えば、7課から12課まで学んだら、続いて1課から6課までを学ぶようになります。つまり、どこからでもレッスンが受けられるように構成されているのです。

各課には救いの計画が織り込まれています。求道者は、予言者ジョセフ・スミスを通して福音が回復されたことや、神殿と神権の儀式、家族の永遠性、従順のもたらす祝福などについて学びます。また、証についても学びますし、会員の必要を満たすための教会の組織方法についても勉強します。

求道者が末日聖徒の生活に自然になじめるようにすることが大切です。福音の基礎クラスでは、混乱なく、またとまどうことなく多くの事柄を学べるようにします。例えば、教会員生活の長い人にとっては耳慣れた言葉でも新しい人にとっては当惑しがちな「監督」、「高等評議員」、「癒しの儀式」、「断食献金」といったいろいろな用語を学びます。

このクラスではまた、家族と教会との関係や、家族が教会の土台としてどのような役割を果たしているかということについても学びます。

福音は、大きな問題を「処理する」のに大いに役立ちます。福音の基礎クラスは、その福音への水先案内人であると紹介するならば、あなたの友人は喜んでクラスに出席するようになるでしょう。

教会員でない友人を日曜学校に招待するにあたっては、まず福音の基礎クラスが開かれているかどうかを確認して下さい。友人が初めてクラスに出席する時には、一緒に行きながら教師やクラスの生徒に紹介するようにしましょう。その後引き続きクラスに出席するかどうかは、状況によります。あなたがいることで、友人が自由に質問できないことがあるかも知れません。このような場合、あなたは自分のクラスに戻り、友人が周囲の圧力を一切感じることなく、教会について静かに考えられるようにします。

逆に、あなたが付き添っていた方が気持ちが休まるという場合には、一緒にクラスに出席できるよう手配する必要があります。

隣人と初めて福音の基礎クラスに出席したある人が、次のように語っています。「私は教会に行くことが初めは不安でした。モルモンは何を信じているのか知りたいと思っていたのですが、だれかにタバコ臭いなんて言われるんじゃないかと内心びくびくしていたんです。何しろモルモンはタバコを吸わないと聞いていたものですから。ところが初めて行った日にだれに会ったと思います？ 何と隣りの家の主人が同じクラスにいたのです。彼も愛煙家でした。彼も私同様恥ずかしそうにしていたのですが、私を見るやにっこりと笑いかけてきました。そして私たちは席を隣り合わせてレッスンを受けました。また皆さんとも和気あいあいと楽しい一時を過ごすことができました。」

ある女性はこのような経験談を話してくれました。「私は自分を導いてくださった隣人を本当に困らせていたと思うんです。もちろん彼女は何もおっしゃいませんでしたけれど。8回のレッスンが終わるまで私は、自分とはまるで関係ない、といった態度で座っていたのです。そんな私でしたが、彼女はいつも一緒に帰ってくれました。ところがある日、いつものように日曜学校を終えて帰宅した私は、腰を下ろしてしばらく考え事をしていました。すると突然、私は自分が思ってもみなかったほどたくさんの事柄を学んできたことに気づいたのです。自分の人生観がわずかずつながらどんなに大きく変化したか、また現在の自分にどんなに希望が湧いてきたかを知って、驚いてしまいました。そこで私は早速彼女に電話で、『教会についてもっと知りたいの。どうすればよいかしら』と尋ねました。彼女は本当に驚いたにちがいません。」こうしてその友人から宣教師を紹介されたこの女性は、それから数週間後にバプテスマを受けました。

教会員でない友人と一緒にクラスに出席する時には、あなたもレッスンに参加して証を述べるように求められるかも知れません。この場合、話合いの場を独占したり、レッスンに関係のないおかしな質問をして脇道にそらせることのないよう十分に注意して下さい。また、あまり話すと、レッスンでわかりやすく福音を学ぼうとする人々に非常な差し障りが生じてきます。ボイド・K・パッカー長老はこれを、「放水中のホースに別のホースをつなごうとする」(1972年10月7日に行なわれた日曜学校役員に対する説教より)ようなものであると言っています。

友人を教会に招く機会が巡ってきたら、まず福音の基礎クラスに連れて行くのが理想的です。このクラスは、福音に対する好奇心を抱き、教会が会員に対して行なっている事柄についての理解の眼が開き始めた人々の必要を満たすための特別なレッスンが行なわれているからです。福音の基礎クラスは、イエス・キリストの福音を十分に理解するための旅路の途中で渡る橋とも言えましょう。

柄にとって代わるものではない。

また、むやみに「知っています」を連発する形式的な証を繰り返すべきではない。このような証は、徐々に本来の影響力を失うことになる。

私たちは、証を述べる時には、福音の原則を教える時と同じように、自然なかつ確信に満ちた声で、最大の敬意を払いながら話すべきである。(ヨハネ13:34—35参照)

2. 心が愛で満たされた時に証する。愛を持って福音の真理を教えること自体が証である。人は愛なくして多くの真理や光を悟れない。従って様々な方法で愛を示すことが必要である。教え、証すること。彼らのために祈ること、また一緒に祈ること。励まし、相手を受け入れること。共に感動し合い、また深く彼らを理解すること。一緒に歩き、また彼のために犠牲を払うこと、である。多くの両親、教師、会員は、3番目までは行なっているが、最後のふたつを実行していない。しかし、実際にこれら5つをすべて行なった時には、その力の大きさに驚くことだろう。

権能が義しく使われているか否かは、その人によるのであって、役職には無関係である。説教と思いやりと柔和と偽らざる愛とを備えた権能ある者の証は、内部の力を欠き、ただ自分の地位にのみ頼る者の証よりも、はるかに力強く人を感化する。

私の意見を言わせてもらえば、キンボール大管長こそ証と言葉において、大胆であると言える。それほど大管長の愛と献身と謙遜な態度はすべての人々に及んでいるのである。

3. 人を非難するために証してはならない。証の目的は人を鼓舞することであって、非難することではない。聖典の中に見られる人々の心を貫き通すような数々の証でさえも、最終的な目的は、人々を悔い改めに導き、祝福をもたらすことであって、決して非難するためではなかった。

4. みたまの勧めがある時には、相手の存在と価値について証する。また、神の助けがあれば、与えられた真理を受け入れ、それに従うことができることを証する。さらに従うかどうかを選択する自由意志のあることも証する。伝道部長であった時、私は、直面した問題や障害を含めて改宗の過程を書き送ってほしいと、新しい改宗者一人一人に手紙を出した。返信の半分が、最初から福音の真実性を疑ったことは一度もない、ただ自分自身のことを思いわずらったと記してきた。彼らは、自分に真理を受け入れて生活するだけの価値と能力があるだろうかと自分自身に疑いを抱いたのである。

しかし、人は自分が永遠の存在であって、神の属性を受け継いでいることを意識し、いかなる環境にも適応する意志と力のあることを知ると、潜在していた本当の自分が解放されて強くなるのである。

また、相手の価値と存在を証する時、その証は、相手に大きな希望と勇気を与える。

5. 靈感を受けたならば、証が与えられる過程について証する。証は聖霊によりもたらされる。心を開いて求め、

すでに知っている真理に忠実であろうとする者に証は与えられる。多くの人々は真理は知性で理解するものであるという考え方を持っている。それも証の一部ではあるが、重要な要素ではない。人は、すでに得ている真理に忠実である度合に応じて、新たな真理を知るのである。従って、私たちは真理を得るためには、まず忠実でなければならない。私が教えた人々の中に、ジョセフ・スミスのお話を疑った者がたくさんいた。そういう人々はみな、タバコや茶(あるいは、みたまが良しとされないもの)に関して問題を抱えていた。そこで、私たちは彼らに、知恵の言葉を守れば、ジョセフ・スミスが予言者であるという証をはじめ、数々の隠れた知識を見いだせるであろうと述べた。「信仰の度を試してからでないと証が得られないからである。」(イテル12:6)自分の持つ本当の問題が何であるかをすぐさま認識した人々の多くは、やがて悪い習慣を克服し、約束通りの祝福を得た。

6. あなたと同じように、みんながみたまを感じていると思う時に証する。そうでなければ、「思い違い」(ヤコブ4:14)をし、より劇的で神秘的なものを追い求めるようになり、静かな細い声の持つ快さや調和、それに力強い平安を見失ってしまう。「皆さん、祈りの気持ちをもってモルモン経を心から受け入れる時、私たちが今受けているこの安らかなみたまを感じることでしょ。」

7. ゆっくりと間を置いて証する。このようにすれば、相手も考え、感じる余裕もてる。ボイド・K・バックー長老が、ニューイングランドへ伝道に行く宣教師たちに、福音を宣べる時にはゆっくりと話し、特に証をする時には、みたまが偉大な改宗の奇跡を起こすことができるように間を置いて証しなさい、と語ったのを思い出す。「心を静め、確信を持って、相手の目を見つめ、そして証しなさい。」

「汝らつつしみて、わが神なることを知れ。」(教義と聖約101:16)

8. 聞き手のわかる言葉や表現で証する。非教会員の理解できない教会用語を使うことは、意志の疎通を凶る上で無用な妨げとなる。「証」「聖餐」「神権」「家庭の夕べ」「ワード部」などは理解しにくい言葉である。このような言葉はほかに多い。)外国語を学ぶ時と同じように、私たちの気持ちを伝える時にも、ちゅうちょせずに相手の言葉を使って表現すべきである。

これに関しては、主御自身が完全な模範を示された。予言者たちもまたそうである。ニーファイは次のように言っている。「私の身も心も明瞭なことを喜ぶ。何故ならば主なる神が人間に為したもうことは明瞭であるからである。主なる神は世の人に解らせるためにそれぞれの言葉で語り、そしてかれらがよく解るようになったもう。」(IIニーファイ31:3)

9. 証できるよう自らを整える。特にみたまを祈り求めることである。また、証をする勇気を求める。断食と悔い改めをして、自らを謙遜にする。月例証会が断食と誓約の更新後に行なわれることは、このことを表わしている。ま

た、このような集会で述べる証は、単に美しく適切な感謝の表現以上のものである。またそれは、確信を表明し、自分の気持ちを述べ、イエス・キリストは神の御子であり、ジョセフ・スミスとその後継者は予言者として召された人々であり、教会はイエス・キリストによって導かれていることを深く確信する霊の叫びを反映する。

私たちの生活そのものが最も良い証である。特に、他からの圧力に屈することなく、義しく生きる姿は、それ自体が立派な証である。そして、私たちが心から信じるものを反映している。私たちの行ないが告白する信仰と一致する時に、主は、私たちを通して、私たちが会おうすべての人々に証を述べて下さるのである。

10. 証する。しばしば証する。毎月、毎週、毎日、証する。あらたまった時にも、くつろいだ気持ちの時にも証を述べる。筋肉と同じように、証の力も、使うたびに強くな

るであろう。

個人や家族、さらに国家さえも正すことができるのはただひとつ、神聖な真理と力についての証である。そしてこの証を持っている者は、天父の子供たちの中でごく少数；つまり私たちだけである。その私たちが、不純であったり人を恐れたりして、その証の力を十分に行使できないとしたら、一体主はどのようにして奇しきみ業を成し遂げられるだろうか。「塩もし塩気を失わば、何を以て世に塩の味をつくることを得べきか。」(Ⅲニーファイ12:13)「されど汝らの中、或る人々はわが悦ぶところにあらず。そは彼ら人を怖れて、己が口を開かんとせずしてわが与えたる才能をかくすによる。禍なるかな、かかる人々よ。わが怒りは彼らに向いて燃ゆればなり。彼ら今より更にわれに忠実なるにあらざれば彼らの持つものまでも取り去られん。」(教義と聖約60:2-3)

私を改宗に導いた 義姉の証

ジュッタ・スロベック

これは私の改宗談です。私が改宗したのは、天使が私に現われたからでも、不思議な夢を見たからでもありません。聖霊の力によって語られた強い証を聞いたためです。そしてそれが私の生活を変えたのです。

夫の家族はすでに数年前に教会に入っていました。けれども夫も私もまだ教会員ではありませんでした。しかし私たちが近くにある支部の日曜学校や断食証会に出席し、心地よく胸を打つ経験を味わっていました。にもかかわらず、まだ私は教会について知りたいとは思いませんでした。

最初は夫も教会に対して気乗りがしませんでした。実際彼は父親に向きになって反抗したりしました。けれども何度も繰り返しレッスンを受け、一般の書物と宗教に関する書物の両方を真剣に読んだ後、ついに夫のアクセルは、末日聖徒イエス・キリスト教会こそが真理と主の権能を擁するという結論に達しました。そこで彼は私に知識の大切さを納得させようと思いました。

私には理解できないくらい彼は突然熱心になりました。そうすると、私ののんびりした生活が脅かされるのではないかと、私は恐れるようになりました。とにかく私は彼が教えようとする言葉に耳を貸そうとはしませんでした。私たちの関係は気まずくなり、時おり激しい口論さえするようになりました。

義父と義姉の予期せぬ訪れを受けた時も、私たちの状態は同じでした。私は急ぎの家事に追われ台所で忙しく働いている間、アクセルは居間にいて、彼の父と姉と一緒に福音について話し合っていました。私が台所にいると義姉が入って来て、しばらく私をじっと見つめて立っていました。それから不意に、「ジュッタさん、アクセルがバプテスマを

受けようとしていることに対してどうお思いかしら」と尋ねました。

「そうね、どう言えばいいかしら。少なくともそれが何であるかを知るために真剣に勉強しなければならないと思いますわ」と答えました。そうは言ったものの、私は自分が何をしなければならないのかわかっていなかったと思います。

すると義姉は言いました。「ジュッタさん、私はこれらのことが真実であることを知っているわ……。」そして彼女は福音が真実であり、末日聖徒イエス・キリスト教会が真の教会であることを証しました。その時の彼女の確信と愛に、私は胸を打たれたのでした。

ふさわしい時に、ふさわしい言葉で述べられたこの証によって、私の心は備えられ、数週間後には喜んで宣教師のレッスンを受けることができました。私は最初はまだ熱心になれませんでした。驚いたことに、すべての割当てを喜んで受けることができました。私はモルモン経を読み、声を出して祈るようになりました。また人生の目的についても理解できるようになりました。そして、福音が非常にわかりやすいものであることに何度となく驚いたものでした。宣教師の教えが非常に論理にかなったものであると思ったことも、よく覚えています。

こうして私は教会が真実であるという証を得ました。前にも話したように、天使は現われませんでしたし、不思議な夢も見ませんでした。けれども、私は、ジョセフ・スミスがこの末日に私たちにもたらしたメッセージをはっきり理解することができたのです。

1967年1月21日、夫と私はバプテスマを受けました。私がこうして福音を理解するようになったのは、義姉が証を述べて私に必要なきっかけを与えてくれたからです。以来私は、靈感された証によれば多くの事柄が達成できることを学んできました。今日私は数限りない他の末日聖徒と共に、主が生きておられ、末日聖徒イエス・キリスト教会が主の教会であることを証することができます。

たったひとりの人によって……

アルゼンチン・ブエノスアイレス南伝道部
エミリオ・O・ベルヘリ

40年ほど前のこと、アルゼンチンのコルドバに近いある町で、ふたりの若い宣教師がある婦人に福音を教えることになりました。彼女は5人の子供を抱え、経済的には決して楽ではありませんでしたが、主の助けによってどうにか子供たちを養っていました。そんな子供たちの中で、一番熱心に宣教師の言葉を聴いていたのが末の子でした。彼は宣教師の言葉を心に深く刻み込んだのです。そして、成長するにつれて、彼の証は強くなっていきました。やがて立派な女性と家庭を築き、子供をもうけ、教会の責任も数々果たすようになりました。ワード部の監督を務め、現在はステーキ部高等評議員として働いています。彼の人生最大の望みは、自分の息子たちを宣教師として送り出し、人々に永遠の真理を教えることでした。

彼の望みはかなえられました。この彼とは実は私の父で、その息子である私は今、専任宣教師として働いています。読者の皆さんは、私がなぜこのようなことを書いているのか疑問に思われることでしょう。それは私が次のような経験をしたためです。

約2ヵ月前に、私は同僚とふたりでタンジルという町で伝道を終えて宿舎に帰ろうとしていた時のことです。私たちは、前に訪問してだれもいなかった数軒の家をもう一度訪問した方がよいと、心に強く感じました。私たちがドアを叩くと、ひとりの婦人が出て来ました。婦人は私たちを見ると、こちらから紹介する間もなく、こう言いました。「あなた方はモルモンですね。やっと来て下さいましたか。もう1年もあなた方をお待ちしていますわ。」

驚いたことに、彼女は教会に宣教師を送って下さいと手紙を書いていたのです。しかし、返事は一向に来ませんでした。(そのはずです。宛名が間違っていたのですから。)それから彼女は、ここは自分の家ではないので、自分の家に来て教会についてもっと教えてほしいと、言いました。私たちは早速訪問の約束をして、そこを出ました。

秋の膚寒い朝、私たちは自転車に乗って、彼女が教えてくれた家を捜しました。家に着くと、ガルシヤというその婦人と子供たちが3人、私たちを待っていました。私たちはあいさつをして家に入り、すぐに第1課のレッスンを始めました。部屋は広く、少し寒く感じるほどでしたが、婦人と3人の子供たちは寒さなど気にもせず私たちのメッセージを聞いてくれました。私たちの説明は十分ではなかったかもしれませんが、主はみたまを注いで下さいました。

レッスンを終えて外に出た時、私たちふたりは、この家族には福音を受け入れる備えがあると感じました。

翌週私たちが再び訪れると、ガルシヤ夫人は、10歳にな

る長男のアルベルトが宣教師になりたいと言ったということです。私と同僚はこの少年をじっと見つめ、救い主がこの永遠の宝を彼らに分かち与えるようにと、この選ばれた家族を私たちの手に託されたことを強く感じました。3回目のレッスンの時、同僚は主のみたまに導かれるままに、彼らにバプテスマのチャレンジを与えました。ガルシヤ婦人は目に涙を一杯浮かべ、長男の手をしっかりと握りしめ、そのチャレンジに応じてくれました。そして彼女は、私たちの教えていることが神から来たものであることは初めからわかっており、これこそ長い間探し求めていたものですよと言いました。

レッスンはすべて終わり、ガルシヤ婦人と息子のアルベルトがバプテスマを受ける、待ちに待った日がやってきました。恵まれて、私が彼らにバプテスマを施すことになりました。私はこれまでこれほど大きな喜びを心に感じ、主のみ業に携われることを主に感謝したことはありませんでした。私はアルベルトを水に沈めながら、こうして受け入れた永遠の真理を人々に宣べ伝える時の彼の姿を心に描いていました。

その日の夜、私は寝室でひざまずき、私の祖母がこのガルシヤ姉妹と同じようにこの福音を受け入れてくれたことを天父に感謝しました。また父がこの福音を守って、私が教会の中で生まれ育てられたことにも感謝しました。さらに今、こうして私自身も主のみ言葉を宣べ伝える者として働けることを主に感謝しました。

この先、主が私にどれ程多くの人々に福音を宣べ伝える機会を与えて下さるかわかりませんが、この福音を聞きたいと私たちを待っている多くの人々のことを考えると、私の身も霊も言葉に言い尽くせない喜びを覚えるのです。また、アルベルトが宣教師になって、彼の証と教えによって改宗する人々のことを考えるのです。彼らもやがて他の人々に福音のよきおとずれを宣べ伝えることでしょう。そしてその子供たちもいつか宣教師になることでしょう。そんなことを考えていると、ふと私の心に次のような思いが湧いてきました。「たったひとりの人にバプテスマを施すだけで、何と多くの人を改宗できることだろうか」と。

ある人がかつてこう言いました。「りんごの種は数えることができる。しかし、ひとつの種から生じるりんごは数限りがない。」私は今初めてこの言葉の意味がわかったような気がします。

宣教師の双肩には非常に大きな責任がかかっていることを、私はよく知っています。と同時に、末日聖徒の若人がその生涯のうちの2年を神のみ業に捧げ、主の力を実際に目にするには、何にも換えがたい幸福であることも知っています。人々に悔い改めを説けることは、何という素晴らしい特権でしょうか。

たったひとりの人によって、一国が改宗されることもあり得るのです。少数の人々に宣べ伝えるだけで、何と多くの人々が救いをもたらすこの福音の恵みにあずかれることでしょう。私たちには決して想像できないのです。

伝道のみたま



ジェイコブ・ディエガー

かつて、私はオランダのある地方部大会で、「すべての会員は宣教師である」という教えについて話をしたことがある。その大会後、ひとりの女性が目に涙を一杯浮かべて私のところにやってきた。「私はどうしたら立派な宣教師になれるのでしょうか。求道者にどのように教えればよいかわかりません。」私たちはこのことについて明確な説明を欠いていた。そのために彼女には、求道者と宣教師の橋渡しをして、彼らが親しくなるようにすればそれでよいということがわからなかったのである。彼女が恐れたのも無理からぬことである。

教会員の中で、このような恐れを抱いている人がほかにも大勢いると思う。主は私たちが恐れることを望んではおられない。私たちが幸福であって、その幸福を分かち合うようにと望んでおられる。伝道のみたまは主のみたまである。

私はこれまでに、伝道活動をしたいと望んでいながらその方法を知らない立派な教会員に大勢会ってきた。私たちはどのようにすればこの伝道のみたまを得ることができるのだろうか。それに関して次の4つの提案をしたい。

1. 福音に改宗する。私たちは自分が救い主の戒めを守っていない限り、兄弟たちを力づけることはできない。まず、自分自身が改宗することである(ルカ22:32参照)。そのためには求道者と全く同じことを行なう。つまり、福音を学び、祈り、教会に集って、主のみたまを受けることである。

2. 証を得たら、次は教会の律法に忠実に従うことである。主は不従順な者に決して伝道のみたまを与えたまわれないからである。とは言っても、私たちが完全でなければならないと言うのではない。神殿推薦状を受けるに足るふさわしさを身につけることである。会員たちは、伝道活動の励ましを受けたすぐ後に、私にしばしば次のようにその心の内を打ち明けてくれた。「私には宣教師は務まりませんし、人に証を述べることなどできません。自分は正直者ではないし、タバコを吸っていますから。」あるいはそれが自分の

一を納めていないことや、家族に思いやりを示していないことから生じる場合もある。

3. 私たちは毎日、伝道のみたまが得られるように祈らなければならない。このことはいくら強調しても過ぎるということはない。私たちは伝道活動の証を得ようと思っても、それを願い求めなければ与えられるはずはないし、みたまの助けなくして伝道活動を行なうことはできないからである。

4. 私たちは日々の活動において識別のみたまのささやきに留意する必要がある。そのみたまは、だれに、どのように話しかければよいか、あるいは相手の人はどのような人であるかをささやき、教えてくれるからである。私は以前の会社の仕事でもそうだったが、現在の教会の仕事でも各地を旅行することが多い。そこで思いついたのが、「現地伝道」である。これは、郵便局で切手を買うために並んでいる時や、バス停やマーケットで列をつくっている時に伝道するというものである。私たちはこれまで、長い時間をかけて人々と親しく交わるように勧められてきた。そのために、家族のフェローシップ・プログラムとしていろいろな方法が紹介されている。しかし、この「現地伝道」は見ず知らずの人に対する伝道である。

人は「十人十色」であり、一人一人に効果的な接し方をしようとすれば、必然的に相手の人がどういう人かを知らなければならない。そして聖霊は相手がどういう人かをよく御存知である。従って、助けを祈り求め、注意深く耳を傾けることがその人に合った伝道方法を知るために最も大切になる。以下に、私たちの体験を通して得た福音の伝え方を幾つかあげてみよう。

1. 愛想のよい人。このタイプの人には、あなたがモルモンだと聞くと大変喜ぶ。モルモン・タバナクルの合唱は素晴らしいとほめる。しかし、数分後には、にっこり笑って立ち去る。このような人にはどのように話しかければよいのだろうか。まず私たちがこうして知り合ったのは決して偶然ではないことを述べ、主が非常に大切なメッセージを用意しておられることを証し、彼の名前と住所を聞いて宣教師に紹介する。私たちの責任は教えることではなく、宣教師との橋渡しをすることである。

2. 快活で話し好きな人。このタイプの人にはあなたとも喜んで話をし、家族や趣味、仕事など、何でも話をしてくれる。しかし、話題をひとつに絞ることがなかなかむずかしい。このような人にはどのように伝道すればよいのだろうか。主のみたまによれば、彼が話している事柄、特に彼が関心を持っている事柄を福音の教えにどのように結びつけることができるかがわかる。ある時、ひとりの人が、子供たちの幼ない内から家族と一緒に時間を持つことは大切であると話していた。私は間髪を入れずに、「それは素晴らしいことです。私たちの教会で教えているのも実はそのことなんですよ」と言って、その人に家庭の夕べのプログラムを紹介した。

3. 落ちつきのない人。このタイプの人は何度も話の腰

を折る。興味を示してくれるかと思えば、すぐに気が変わる。また論議を呼びそうな問題を取りあげては、モルモンの見解はどうかと質問してくる。多くの教会員はそのような問題など考えたこともなく、ろうばいしてしまう。しかし、私たちはそのような質問には答える必要がない。彼の定まらない性格を逆用して、私たちの信じている人生の目的について説明したいので宣教師を派遣してもよいかどうか尋ねるとよい。

4. よく見かける第4のタイプは、あなたの友好的な態度を喜んで一方で、それ以上深入りすることを恐れているといった、いわゆる優柔不断な人である。このような人はいろいろなことを一度に教え選択させようとするので、恐れを抱いてしまう。そこで、伝道活動は、天父の子供たちすべてに救いを得させるために天父が定められた計画の一部であることをまずはっきりと証する。そしてメッセージを受け入れるかどうかを今すぐ決める必要はないことを告げ、宣教師からもっと多くの事柄を学ぶように勧める。

5. 第5のタイプとしてよく見かけるのに、慎重思考型の人がある。このタイプの人には自分の意見を述べる前に、できるだけ多くの説明を聞きたいと言う。私たちがなぜそのようなことをし、それがどのような益になるのか知ることがを欲する。そのような時、直ちに聖典を取り出して、自分の好きな箇所を引用して、その意味をよく彼に考えてもらおうようにする。そうすれば、興味を示してくれるに違いない。宣教師との集会でも、重大な問題について話し合うという形式をとった方がこの人の性格に合うことだろう。

6. これと少し違うのが無口な人である。このタイプの人には、腕を組み、無表情で、ただ黙って聴くだけである。往々にして見かけよりも関心度が高く、自分を適度に抑えて、相手の気持ちを上手にくみ取っていけば、非常によい伝道ができる。時折、私たちは福音を宣べ伝える熱心さのあまり、必要以上のことを話してしまうことがある。私たち夫婦はよく心の中で祈り、ふたりで話し合っている福音の原則についてよく考え、わからない事柄を尋ね、その答えを待ったものである。もし私たちがじっと待って、彼らが心を割って話をするようになれば、その心には信頼の芽が育ちつつあると考えてよいだろう。

7. 一見友好的ではあるが、近づきたくない人。私もかつてはこのようなタイプの人間だった。昔、宣教師にこう言ったことがある。「あなたがたの行なっていることには非常に感じる場所がありますし、立派なことだと思います。しかし、私は現在の生活を変えてまでそうになりたいとは思いません。仕事もあるし、車や家もあります。それに愛する妻や子もいます。今の生活で十分満足しています。」すると宣教師は私に、あなたがこの世を去る時、つまり今持っているものすべてを失う時のことを考えて下さいと言った。それは私にとって非常なショックであった。私はそのようなことを考えたことはなかった。恐らく大抵の人がそうであろう。こうして私は、ほかに大切なことがあることに目覚めたのだ。

それでも私は友人たちから離れ、自分がこれまで大切にしてきたものをあきらめることができなかった。幸いにも、主は私に素晴らしい伴侶を与え、最も大切な道を選べるようにして下さった。妻は初めから証があったにもかかわらず、私と一緒になければバプテスマを受けようとしなかった。そんな妻の態度から、私は自分にとって、また私たち夫婦にとって何が一番大切かを考えるようになった。富や社会的地位よりも大切な、私が本当に求めているものが何かを知ったのである。

8. ひときわ異なるタイプに、偏見を持った人々がいる。彼らはよくこう言う。「ああ、モルモンですか。よく知っていますよ。多妻結婚でしょう。それから無理やり収入の1割を払わせられ、多くの問題を抱えたアメリカを離れて、わざわざ私たちに教を宣べ伝えようとしている。」こういう人々への働きかけとして、絶えず友好的な態度で、その情報をどこから得たのか尋ねてこう言うといい。「私もモルモンのひとりとして、そのような話に深い関心を持っています。でも、あなたの話をお伺いしていて、あなたがそのようなおっしゃるのももっともだと思います。どうでしょう。一度宣教師にお会いになって、教会の説明を聞いてごらんになりませんか。そうすれば、あなたも教会の教を もっと完全な形で理解できると思います。」

9. 熱心な人。このような人は、真理を求めて祈っている人である。私たちは真理を知っていることを証するだけでよい。通常、宣教師を喜んで受け入れるだけでは終わらないはずである。当然のことながら、こういったタイプの人には今までの人々と比べて非常に少ない。

もちろん多くの場合、私たちはただ種を蒔くだけである。そして、そこからいつ芽が出て、実がなるかだれにもわからない。最近、フィリピンのバグイオでの軍人の大会を終えて、マニラに向かう途中でのことである。飛行機の遅れで、しばらく飛行場で待つことになった。すると、英語を全く話せないふたりのフランス人女性が言葉がわからず困っていた。私は早速ふたりのところに行き、フランス語で「どこまでおいでですか」と尋ねた。ふたりは私と同様マニラへ行こうとしていた。それがきっかけで、飛行機を待っている間、私たちはいろいろなことを話すことができた。当然のことながらふたりは私の旅の目的を尋ねてきた。そこで私は教会のことを説明した。教会のことと言っても、日の光栄の王国とか、天使モロナイのことではない。このような不測の事態に直面しても忍耐するように、福音は教えていること、またなぜこの福音は私を幸福にしているかといったことについてであった。私はこのふたりの女性に名刺を渡し、是非宣教師に連絡を取って下さいと言って別れた。私にはこうして蒔いた種がその後どうなったか知る術もない。ある面から見れば、それは私が知る必要のないことかもしれない。私は人々に福音について語り、その時に主のみたまの助けを感じることで自分自身幸福を得られるからである。そしてこの幸福は、求めるならば、毎日得ることができるのである。

伝道活動は家庭から

——家庭内の教会員でない家族に対する伝道——

アーネスト・エバーハート・ジュニア

教会員でない夫（または妻）をもつ姉妹（または兄弟）から繰り返し尋ねられることに、「夫（または妻）の心をもっと教会に向けさせるために、私は何をすればよいでしょうか」という質問がある。この質問に対する「正解」が得られれば、私たちの生活は変わることだろう。

まず考えていただきたい事柄が幾つかある。最初から難問で恐縮だが、「どうして私の夫（または妻）は福音に基づく生活に関心がないのだろうか。」これは非常に重要な質問である。なぜなら、いかに立派な治療を施そうと思っても、正確な診断の裏付けがなければ何もできないからである。その診断も時間をかけ、忍耐強くしかも完全に、祈りの心をもって行なったものが必要である。先を見通し、的確な判断を下すためには、時間を十分にかける必要がある。もし教会に信頼できる友人や指導者がいれば、その人に相談して、あなたの夫（または妻）が霊的に何を必要としているかを判断することができる。いずれにしても、よく思い計り、聖きみたまの確認を得て正確な判断を下すならば、福音が生活においてどういう意味をもっているかを夫（または妻）に、よく理解させることができるはずである。

さらに、次のような質問についてはどうだろうか。教会が彼の余暇の妨げとなっていないだろうか。彼は友人を失うことを恐れてはいないだろうか。どうしても断つことができないと思いついてはいる習慣はないだろうか。これまでに教会員と問題を起こしたことはないだろうか。教会の教義や儀式をあまり知らないために、集会で退屈に感じたり、当惑したりしたことはないだろうか。以上はほんの一部であり、ほかにもいろいろな問題が考えられると思う。もう一度繰り返すが、彼の霊的な要求を満たし、福音生活の望みを起こさせるためには、現在彼に欠けているものは何で、それを満たすにはどうすればよいかを判断することである。

彼に必要なものがわかったら、それを紙に書き出す。そしてそれを読み、検討し、よく祈り、瞑想してひとつの行動計画を立てる。文字にしない目標は、結局希望で終わることが多いからである。まず自分がなすべきことを確実にしようではないか。

「されど見よ、われ汝に告ぐ、汝心の中によく思い計り、その後問うこともし正しからば汝問わざるべからず。問うこと正しからば、その時われ汝の心を内に燃やさん。これによりて汝にその正しきを感じしむ。」（教義と聖約9：8）

次は計画の実行である。何を行なう場合でも、まず必要なのが忍耐である。何事も、段階的に一步一步進めていかなければならない。いかなる場合でも、本人が負担に感じることがあってはならない。人間の性格は元来非常にがんで、容易に変えられるものでなく、忍耐強く少しずつ改めていくしかないのである。もしあなたがその改善の障害となっている要因を急いで取り除こうとすれば、精神的な混乱を与え、手の施しようのない極度の緊張と錯乱状態の中に彼を陥れることになる。

結婚によって結ばれた夫婦の精神的な絆は非常に強い。そしてこの愛の絆は、互いに価値ある人間として受け入れ、尊敬し合う気持ちの中でさらに強められてゆくものである。ところが、教会員でない相手に、教会員に求められる性格に変えるよう要求するとすれば、それは不適格のらく印を押すことであり、結局は怒りを招くことになる。そして、このような要求をして相手を傷つけたり、怒らせたりするのではないかという恐れを抱くことも、相手を福音の改宗へと導くのに大きな障害となるのである。では、ここでそのひとつの例を見てみよう。

ヘンリー・マッケイという人が、教会に非常に熱心で活発なある女性と結婚した。しかしヘンリーは彼女の家族に会うといつも、自分のような非教会員と結婚したことで、皆が自分たちを白い眼で見ているように感じた。これが度重なるうちに、彼は次第に防衛的になってきた。そして、家族の集いに参加しなくなった。そうするうちに、彼女の家族の短所や欠点が目につくようになり、その怒りを妻にぶつけるようになった。

感受性の強い彼の妻は、そのことにすぐ気づいた。彼女は夫を愛しているし、忠実で献身的な女性だった。そして、いつの日か夫が教会に入って、活発な会員になってくれるだろうと思っていた。丁度ヘンリーが出張していた日に家族の集いがあったので、彼女は早速行動を起こした。この

問題を家族の前に持ち出し、自分の夫は立派な人であると訴えた。ただこれまでに福音の計画を知る機会がなく、教会に入れなかっただけで、夫も自分たちと同じ神の子であることを認めてほしいと頼んだ。そして彼の性格のよい面を見てほしいと言った。こうして家族は、温かい眼で彼を見守り、理解していこうということになった。

するとヘンリーの態度が変わってきた。自分も受け入れられると感じることによって、彼女の家族との関係はよくなり、次第に自分の生活を教會的に変えるようになってきた。こうして彼は妻の信頼に応え、活発な教会員となったのである。

福音の原則が最も容易に受け入れられるのは、それが愛と関心の中で与えられた時である。慈愛、すなわちキリストの純粋な愛は、かたくなな態度や信念を和らげる万能薬である。日々の活動や交際の中でも、真の愛があれば、人を思いやり、尊敬する気持ちが高められる。幸福な結婚生活を営むためには、明かるさと信頼を保つように最善の努力を払うことが必要である。夫婦はそれぞれ神から賜った責任を完うするためにできるだけ互いに助け合わなければならない。たとえささいなことであっても相手をほめ、励まし、相手の進歩を認めることは、信仰に基づく生活に導く上で、強力な手段となるものである。特に大切なことは、家族会議や家庭の夕べ、そのほかレクリエーション活動においても、父親が主導権をもつようにすることである。こうした努力と献身は愛を深め、心を開き、永遠の家族生活を望む気持ちを強くするのである。

これは何度でも繰り返す価値のある真理であると思うが、人の態度や信念は、その人が人生に対して抱いている気持ちの上に築かれているものである。従って、私たちが心を配り、その福利に関心を寄せ、彼らが価値ある人間になろうとしているその努力を温かい目で見守っていることを気づかせることができるならば、人々は心を開いて、福音が自分たちの生活をどのように幸福にするものであるかを理解するようになるであろう。

伝道部長であった時、私は大勢の改宗者に、教会に入った理由を尋ねたことがある。これに対して、「友人がいたからですよ」と答えた人が非常に多い。通常非教会員は、すでに福音を信じている人々から受け入れられることによって、福音を受け入れるようになるものである。人は一般に、原則に改宗する前に、人間に改宗するのである。前に指摘したように、まず配偶者を改宗しなければならない。その次に必要となるのが教会の新しい仲間である。私たちはこの人間の性質に関わる基本的な真理に気づくまで、いくら努力しても大きな障害を取り除くことはできないのである。人は友好の輪がないところにはなかなか足を踏み込めないのである。

この新しい友好の輪も最初は1対1で、少しずつその輪を大きくしなければならぬ。大勢の人々の中では落ち着かないという人がいるかもしれない。そのような人を初めから教会に連れてきてはならない。これが即、あなたの夫

(または妻)に当てはまるというわけではないが、よく判断して決めなければならない。教会の活動に参加することをためらっている人々は、信仰がないからではなくて、憶する気持ちがあるためであることが多い。従って、新しい人々への紹介や、活動への招待は徐々に行なう必要がある。最初は家庭でパーティーを開いたり、旅行を計画する方がよい。そして次第に建築計画や福祉計画への協力を求めたり、扶助協会や神権組織の社交活動など、レクリエーション活動にも楽しく参加できるようにする。夫(または妻)がすでに特別な才能や関心を持っていることがあれば、それに関連したスポーツやレクリエーション活動に参加するように提案してみるとよい。

恐らく、子供ほど両親に大きな影響を及ぼせる人はいないであろう。数年前、私はアイダホ州でセミナーの実験プログラムに参加した。それに参加した生徒は皆、レッスンプランを覚えて、家庭で両親にレッスンすることになっていた。子供たちの中には両親が不活発であったり、教会員でない者もいた。彼らは両親が活発に教会に集い、神殿で結び固めができるようにと望んでいた。レッスンをする子供たちの熱意に、ある両親の心は和らぎ、教会の集会や活動に活発に集いたいと思う心が再び呼び覚まされたのだ。この実験プログラムを行なったステーキ部長はこう報告している。これまで教会員の活発化や、父親に神権昇進の意欲をもたせるためにいろいろなプログラムを行ってきたが、今回のプログラムはそのいずれにも増して効果があった。事実子供も両親を導くことができるのである。従って教会員でない家族を教会に導くプログラムに彼らに参加させる機会を持つようにすべきである。

ある販売会社では各室に次のような標語を掲げていた。「人が買う物を売ろうと思えば、その人の目で物を見る必要がある。」以上、教会員でない家族に福音に対する関心を持たせる方法をいろいろと提案してきたが、最善の方法を一言で言うとしたら、これである。この方法によれば、これまでしばしば努力を無にしてきた自我の衝突も避けることができる。人は生来福音を受け入れるようになっており、夫婦が互いに愛し合い、必要とし合うならば、今すぐにでも永遠の家族になることができるのである。この愛が福音に添った生活をしたいという望みや必要性を生むようになる。これで、「夫や妻、子供にどのようにすれば教会に対する関心を持たせることができるか」という質問におおむね答えられたと思う。

愛に満ちた、誠実で、模範的な家族関係を維持することが、天父のみもとへ帰るのに最も大切である。ともかく、あなたの家庭にある良き事柄をいつくしみなさい。あなたの夫(または妻)が持っている、すべての良い性格や徳を忘れてはならない。夫(または妻)が結婚生活の初めからあなたの愛を得て、それを次第に大きな愛へと育てていくことができれば、それが将来の夢をかなえさせる最大の力となるのである。

「今は私についてきなさい」

キャサリン・H・アイブソン

シタ・マタエル・ロム姉妹はトンガに住む教会員です。彼女の切なる願いは、15人の子供たちを全員信仰篤い末日聖徒に育て上げることでした。けれども教会員でない夫のスミューから、「教会へ行き過ぎるんじゃないかね。少しは家にいたらどうだい」とよく言われました。彼は妻がこれらの集会で得た助けや、出席している人々から得た力が理解できなかつたのです。

シタは自分で菜園を造り、そこでできた野菜を少し売って、しばしば家計の足しにしました。そしてそのわずかな収入の中から必ず什分の一を納めました。こうして彼女は子供たちに勤労の価値、正直に什分の一を納めることの価値、教会の集会に出席することの価値を教え込んだのでした。

「今は私についてきなさい。そうすればいつかあなたたちはお父さんに従って行ける時がきます」と、子供たちによく言ったものです。しかし、スミューが教会に対して同じ考えを持てなかつたので、家庭の中で一致と平安を保とうとすることは本当に難しいことでした。「何度も何度も泣きました。私は家庭の中に一致がないことを知っていました。助けが必要でした。」

彼女は10人の兄弟姉妹に囲まれて育ち、両親は忠実な末日聖徒でした。初めて村に教会が組織された時、彼女の祖父マタエル兄弟は、教会堂が建設されるまで教会堂の代りに宣教師に自分の家を提供しました。こうした環境の下で、彼女は証を育んできたのです。

次男のモーゼスが宣教師として働くよう召された時、彼女は彼と、家庭について、また教会に対する父親の気持ちについて長い間話し合いました。彼らはスミューが福音を理

解できるよう主に助けを求めるため、毎週月曜日に断食し祈ることにしました。

月曜日になると時々、スミューはシタが食事をしないことに気が付き、「またどうして食べないんだい」と尋ねました。すると彼女はきまって、「私たちの家庭にはうまく行っていないことがあるので、主の助けが必要なんです。ですから、断食をし、助けて下さるように主をお願いしているんです」と答えました。

そうしたある日のこと、物思いにふけていたスミューはシタにこう言いました。「君がいつも自分の稼いだお金で什分の一を納めているのを知っているよ。僕の方も納めているからね。」こうして彼女はその月は自分の什分の一だけでなく、夫の分も納めることができました。このことは彼女にとって本当にうれしいことでした。

1年間、シタとモーゼスは毎週月曜日に断食をしました。ある日モーゼスは、今晚教会についてお父さんに話をしたいと母親に言いました。そして夕食後彼はひとりで父親と話しました。「お父さん、御存知のように僕は宣教師です。ですから人々に福音を宣べ伝えます。でも誰よりもまずお父さんにバプテスマを施したいんです。そうすれば他の人人にも福音を説くことができます」と言いました。

スミューの目にはみるみる涙があふれました。「私は何年も何年も教会のことを考えてきた。それにこの教会が真実であることを知っている。主は私たち夫婦を祝福して下さい。それで私たちにはたくさんの子供がいて、みんな丈夫で健康だ。私は幸福者だと思っている。だからバプテスマを受けたい。」

スミュー・ロムがバプテスマを受けて教会に入ったのは週末で、トンガでは大々的なお祭りのあった日でした。その後ロム家族はハワイに引っ越し、しばしば神殿に入り、ハワイ州カネアリースターキ部カイルア第2ワード部に活発に集っています。そしてシタは何度も子供たちに言いました。「お父さんに従いなさい。立派なお父さんだから」と。



友人を教会に誘う時の心得

スベンサー・J・コンディ

シューマーハース夫妻は、ふたりの子供を持つ素敵な若夫婦でした。シューマーハース氏は大変なヘビースモーカーで、その悪い習慣から脱け出そうと努力していました。そして、宣教師のレッスンを受けることに夫婦そろって興味を示しました。彼らが2、3回レッスンを受けた頃、私たちは彼らを教会の集會に誘いました。次の日曜日はちょうど断食日曜日でした。

日曜学校に出席した後、私たちはふたりに感想を聞きました。一方ならぬ、熱意にあふれた答えが返ってきたので、私たちはそれならと、さらに断食証会にも出てみるように勧めました。ふたりは少し気が進まないようでしたが出席しました。集會は非常に靈的で素晴らしかったのですが、長引いて2時間近くにもなってしまいました。そのため彼らの小さな子供たちはむずかかって、彼らもほとほと困っていました。

集會が終わって、私たちはまた感想を聞きました。ところがこの度の返事は、日曜学校の時とは打って変わって、熱意のないものでした。シューマーハース氏は、冷ややかにこう答えました。「集會の時間が長すぎます。こんなに長いとは思ってもみませんでした。私の教会へはここ何年か行っておりませんが、こんなに長い集會は初めてです。」

この次は自分たちで来たいと思ったら来ますから、と言われて、私たちはがっかりしました。

私たちの周囲には、シューマーハース氏のような人がたくさんいます。彼らは立派ですし、もちろん、彼らも神の子供です。しかし多くの人はまだそのことを知りません。彼らの多くは、安息日を映画館や遊園地、ゴルフ場、舟遊び場などで過ごす娯楽の日だと考える家庭で育ちました。日曜日は、庭の手入れやペンキ塗りをしたり、車を洗ったり、テレビの野球放送を見ながらビールを楽しむ日だったのです。

では、どうすれば私たちの周りにいるシューマーハース家族の心を動かせるでしょうか。それには、何よりもまず相手の立場に立って物事を考えることです。私たちは日曜日にピクニックに誘われたら、きっと不快な気持ちを抱くに違いありません。それと同じように、十分な準備もなしにただ思いつくまま人を集會に誘ったとしたら、誘われた相手は不快な思いを抱くことでしょう。ですから、相手の状態を知り、相手の立場に立って働きかけることが肝要です。そして、どんな働きかけをする時にも、愛と友情を忘れてならないことは言うまでもありません。

順序を追って

2年前、アーネスト・エバーハード・ジュニア兄弟から、隣人に福音を分かち合うことに関して多くの効果的な方法が提案されました（「聖徒の道」1975年2月号、pp.56—60）。

その中から、友人を教会の集會に誘うまでの準備の段階を幾つかあげてみましょう。(1)まず友達になる。相手のことをよく知り、親しくなってから集會に誘い、宣教師のレッスンを受けるように勧める。(2)あくまでも交流を深めることを目的として、相手を家に招待したり一緒に出かけたりする。(3)「聖徒の道」や教会のパンフレットなどを贈る。(4)家庭の夕べ、補助組織の集會、ファイアサイド、その他親ばくを凶る教会の集會に誘う。細心の注意を払い、よく祈ってこうした下地を築いておけば、日曜学校や聖餐会に誘っても、友情の当然の延長にほかならないと理解してくれるでしょう。

日曜日をいつも菜園で過ごしている人には、聖餐会よりもステーキ部の農場に誘った方がずっと受け入れられやすいでしょう。また、ゴルフや水泳、テニスなどスポーツを楽しんでいる女性には、日曜学校よりも扶助協会の姉妹たちとバレーボールをするように誘った方が、はるかに反応が速いでしょう。夫の場合、その人の才能に応じて、ワード部のソフトボールチームに勧誘したり、長老定員会のパーティー用にスキットを書いてもらったりすることができます。また、そのパーティーでギターを演奏してもらうのもよいでしょう。妻の場合には、まずホームメイキングのレッスンに誘い、それから教養、社会、最後に靈的生活という順序で招くようにするとよいと思います。

子供をカブスカウト、初等協会、ミューチャルなどの集會に誘う時は、両親の承諾を得ることが大切です。わが子の活躍を誇りに思わない親がどこにいらっしゃるのでしょうか。

教会の史跡や神殿、訪問者センターを訪れることや地元教会で行なうオープンハウスは、福音を「順序を追って」紹介するよい機会です。近所の人々を招いてパーティーを開くことも、互いのつながりを強めることはもちろん、近所の人を他の教会員に紹介するよい機会です。このように断食し祈って十分に下準備が整ったら、適当な時機に、「今度の日曜日、御一緒に日曜学校にお出かけになりませんか」というふうに尋ねます。土台がしっかりと定まっていれば、集會に集っても友人がそばにいたので、きっとくつろいだ気持ちでいられるに違いありません。

不安を抱かせてはいけない

私たちがシューマーハース家族の時にしたような失敗を繰り返さないために、集會ではどんなことが期待されているかを前もって知らせるべきにしましょう。そうすればくつろいだ気持ちで集會に臨むことができます。日曜日の2、3日前に、ワード部や支部の何人かの会員に、日曜学校に友人を連れて来ることを知らせます。教会員は普通、そのようなことをしなくても暖かく歓迎しますが、それでも聖徒たちが丁寧に迎えば、招かれた方は気分もほぐれて楽な気持ちになれるものです。

積極的でありなさい

私たちは時々、無意識のうちに、教会の集會について防

御的な姿勢をとることがあります。教会の集会在赤ちゃんの泣き声で妨げられることもあります。しかし、そのような時にはわびてばかりいないで、教会では家族が永遠に続くものであることを教えているので、赤ちゃんも含めて家族ぐるみで教会に集まっているということ、隣人に自信をもって告げるようにしましょう。

教会は聖徒たちをととのえるためにあり(エペソ4:2参照)、私たちはだれもが霊的に成長するために責任を持つ必要があると考えています。従って、日曜学校や聖餐会で口ごもりながら話をする子供がいても、そのことを友人に自信をもって言えるはずで

友好的な聖徒は、隣人に——兄弟、——姉妹と言って話しかけますが、これは、私たちはみなひとつの家族の子供、すなわち天父の子供であることを理解しているためです。現実には、大部分の人が兄弟、姉妹と言って迎えられることを快く感じています。

集会が終わると、教会の玄関付近はにぎやかになります。それについては、教会員は福音の愛というひとつの絆で結ばれているので、顔を合わせることをとても喜ぶと説明すればよいでしょう。これは何も敬虔でないということではありません。お互いへの愛と関心を示したい一念でそうするので

模範を示しなさい

私たちは、ただ言葉だけに終わって、生活が伴っていないことがあります。口に出して言わなくても、交流を深めることはいくらでもできます。家族そろって教会に出かける時、私たちの隣人はどんな光景を目にしているのでしょうか。父親が大声で早く車に乗るようにせかすそばで、母親があたふたと子供の服のボタンをとめながら、せわしなく玄関を出てくる、あわただしい光景を目にしたらどうでしょう。また、教会から帰って来るなりやれやれといった大きなため息をついて、「あーあ、まいっちゃった。あの人の話なんて長いんでしょう。きっと準備していなかったのね」と言ったとします。それが庭の手入れをしている隣人の耳に入ったら、彼らは何と思うでしょう。私たちは時々、隣人にそのような不平やぐちをこぼして、教会の責任が重すぎるという印象を与えてはいませんか。主に仕えることを心から感謝し、この上ない喜びとと思っていることを示しているのでしょうか。

準備のできた人を見つける

人は自分と同じような価値観、態度、考え方を持つ人間に引かれる傾向があることを、かの偉大な宣教師、使徒パウロは知っていました。その理由をパウロは次のように述べています。

「わたしは、すべての人に対して自由であるが、できるだけ多くの人を得るために、自ら進んですべての人の奴隷になった。

ユダヤ人には、ユダヤ人のようになった。ユダヤ人を得

るためである。……

弱い人には弱い者になった。弱い人を得るためである。すべての人に対しては、すべての人のようになった。なんとかして幾人かを救うためである。」(Iコリント9:19—20, 22)

私たちにすべての人を招く責任があります。すべての隣人に、働く仲間に手を差し伸べる義務があるのです。しかし、内気な人には慎重に忍耐強く接しなければなりません。その反面、もっと頻繁に一緒に外出した方がよい人もいます。忘れてならないのは、親しい友達になって初めて実のある伝道ができるということです。

私たちの目標はすべての人を神の王国に招くことですが、すべての人が「早白くして刈り入れを」待っている状態であるわけではありません。このことについて、私たちはイースタン大学の大学院に在席中、貴重な教訓を学びました。私たちは数人の級友を宣教師に紹介したものの、教会にはひとりも連れてくることができなかつたのです。後になってわかつたのですが、私たちは当時、研究に没頭していて霊的な事柄には関心の薄い仲間に多くの時間をかけすぎたのです。自分のすぐ身近にいる人の方がはるかに福音を受け入れやすいということがわかつたのは、その時です。

もう一度機会を

サタンが主のみ業を妨害するために使う手口ののひとつは、教会員や宣教師に、集会への出席や宣教師のレッスンを断わつた人はすでに機会があつたのだから、と思込ませることです。しかし、改宗するまでに何組もの宣教師から教えを受けた改宗者が多いことを考えると、人にとっていつが福音を聞き、また受け入れるのに適切な時であるかはだれにも決められないことがわかります。

パウロは言っています。「わたしは植え、アポロは水をそそいだ。しかし成長させて下さるのは、神である。」(Iコリント3:6)もしアポロが、パウロの伝道によって改宗しなかつた人々に働きかけなかつたとしたら、どうなつていたでしょうか。努力が実を結ばないように見えると、落胆してしまう人がいます。また、時機や計画のまずさを反省する人もいれば、たとえ神が成長させて下さるとは言え、将来本当に改宗してくれるかどうか気がかりで心を痛める人も少なからずいます。

主が神権者に与られた勧告は、私たちが人々を神の王国に導く時にも応用できるように思います。私たちは、ただ説教と堅忍と柔和と温情と偽らざる愛とによって、また親切と浄き知識すなわち偽善にあらざりてしてその人を甚だ大いならしむるものによって、導かなければならないのです(教義と聖約121:41—42参照)。

私たちがこの伝道の業に忠実に励む時、主はその努力を認めて下さるでしょう。主はこう約束して下さい。「すなわち、われ汝らの罪を許してこの誠命を与ふ。その誠命とは、汝らに伝えたるこれらのことを全世界に証するに、汝らの心の中に厳かさと祈りの精神とを固く執りて失わざることなり。」(教義と聖約84:61)



私の生徒

ジャネット・ミラー

私はオーストラリアのシドニーに住んでいた時、刑務所に収容されていた常習犯罪者に、作文の書き方を教えるよう依頼されました。しかし最初私は断りました。刑務所で犯罪人を教える気など毛頭ありませんでしたし、考えただけで恐ろしかったからです。それに当時の私は、自分自身まだ学ぶ身分でしたので、十分な知識がありませんでした。

それから3ヵ月後、私は再び依頼を受けました。しかしこの度はその場ですぐに引き受けました。何かに促されたのだと思います。というのは、考える間もなく、そのように返事をしてしまったからです。私は毎週土曜日の朝、刑務所に通いました。しかし、10ヵ月後に仕事が忙しくなり、また試験を受けなければならないという余儀ない理由でやめることになりました。けれどもこの期間に、私は、すべての人は神にとって大切な存在であり、彼らにも福音を聞く機会を与える必要のあることを知りました。

私は最初の日から宗教家だと言われて嫌われました。「あんたは俺たちと違う。宗教家だ。俺たちには宗教など必要ない」と言われました。私はただ作文の書き方を教えるだけですと繰り返し話しました。その日は9時から12時半まで刑務所にいましたが、帰る頃はくたくたに疲れていました。

2回目は、少しよくなってきました。そして、ある程度教えることができました。でも次の週の土曜日は、また以前と同じでした。授業が始まるや、彼らはこう言いました。「あんたは俺たちと違う。話し方も、考え方も、することも違う。俺たちはこれまであんたについていろいろ話し合ってきた。それで俺たちの中のふたりが、あんたはモルモ

ンじゃないかって言っている。あんたはモルモンなのかい？」

私は啞然としてしまいました。彼らが私の宗教について考えていたとは思ってもみませんでした。私はもっとからかわれるだろうとは思いましたが、とにかくモルモンであることを告げました。すると、彼らはこのように言いました。「聞かなかった方がよかったかも知れないなあ。もうあれやこれやと推測することができなくなってしまったからな。でも、やっぱり知ってよかった。」その日以来、私は福音の質問攻めにあいました。教会のことを教えるはずではなかったのですが、授業を始める前にまず福音を教えるようになってしまいました。彼らは作文をよく書き、よく学びました。私は教会の教えについて話す時間が十分とれるよう、彼らの作文を家に持ち返り、それを添削しました。

彼らの中に、ケビンという人がいました。ケビンはイエスについて美しい物語を書きました。また、刑務所に入る以前、宣教師に会ったことのある人がいました。彼はピーターといい、宣教師の名刺とモルモン経を持っていました。ピーターは福音に対して心を和らげました。もうひとりの犯罪者ラルフには、宣教師に会わせてほしいと、時々頼られました。ラルフはモルモン経を読み、断食と祈りによって、真理に対する証を得たのでした。

彼らは教会の出版物やモルモン経を特別な目で見ていたことは確かです。というのは、宗教に関する書物は嫌われ、破られるのが常だったからです。聖書でさえたばこの巻き紙に使われた程です。

私たちは脚の不安定なテーブルを囲んで勉強していました。そうしたある日、毛布で覆われた何かが、丸く囲んだ椅子の中央に置かれていました。毛布を取り除くと、そこには2週間もの期間をかけ、心を込めて作られたテーブルがありました。手の込んだ鉄製の脚を持つ丸いテーブルで、塗装が施されていました。私が猫の好きなことを知っていたので、テーブルの上には灰色の猫の顔が描いてありました。私はその贈り物に深く感動し、心から感謝しました。

誇りを持ってお話できることは、私のクラスが一番人気があり、毎週平均10人の生徒が出席したということです。それは私がそのクラスの教師であったからではないことを十分承知しています。それは、クラスでイエス・キリストの福音について話し合ったからでした。また、メモ用紙に書かれた数限りない質問に対する答を準備して行くのも、時間外の私の仕事のひとつでした。これについては神権者たちが私を助けてくれました。

私はこの仕事が好きです。またこのような機会があれば、喜んでお受けしたいと思っています。その時は適切に計画し準備し、クラスの要請に応じて福音を率直に教えるようにしたいと思います。今考えてみると、あの時は、だれかがラルフに福音を伝えるべき時だったのだと思います。彼には、福音を受け入れる備えがすでにできていたのです。私が彼のもとに送られたのは、彼に近づく方法が私に備えられていたからに他なりません。私は今なお、彼と文通を続けています。

あなたの教会について 話して下さい

ジョージ・D・ドウラント

マットは15歳の高校生で、彼の通う学校にはモルモンが12人しかいなかった。そのひとりであるマットが、ある問題で決断を迫られたことがあった。クラスの規則では、生徒が正誤問題の言葉を換えることは禁止されている。その規則を破らずに15番の問題に正しく答えるには、どうすればよいのだろうか。マットはその問題を読み返した。

「モルモンの予言者であると主張しているジョセフ・スミスは、モルモン経を書いた。正 誤」

この問題に正しく答えれば、満点が採れると思った。しかし、このような問題にはどう答えたらよいのだろうか。教師は「正」という回答を期待しているのだろうが、実際は「誤」である。

答案用紙を提出する時間になった。マットはすぐに答えを書かなければならなかった。彼は急いで、「と主張している」という言葉を削除し、「書いた」という箇所に線を引いて「翻訳した」と訂正した。そして、「正」の方をはっきりと丸で囲んで提出した。

翌日、教師は出席をとり終わると、「マット、立ちなさい」と言った。

マットは立ち上がった。

教師は厳しい調子で、「15番の問題の言葉を換えた理由を話しなさい」と言った。

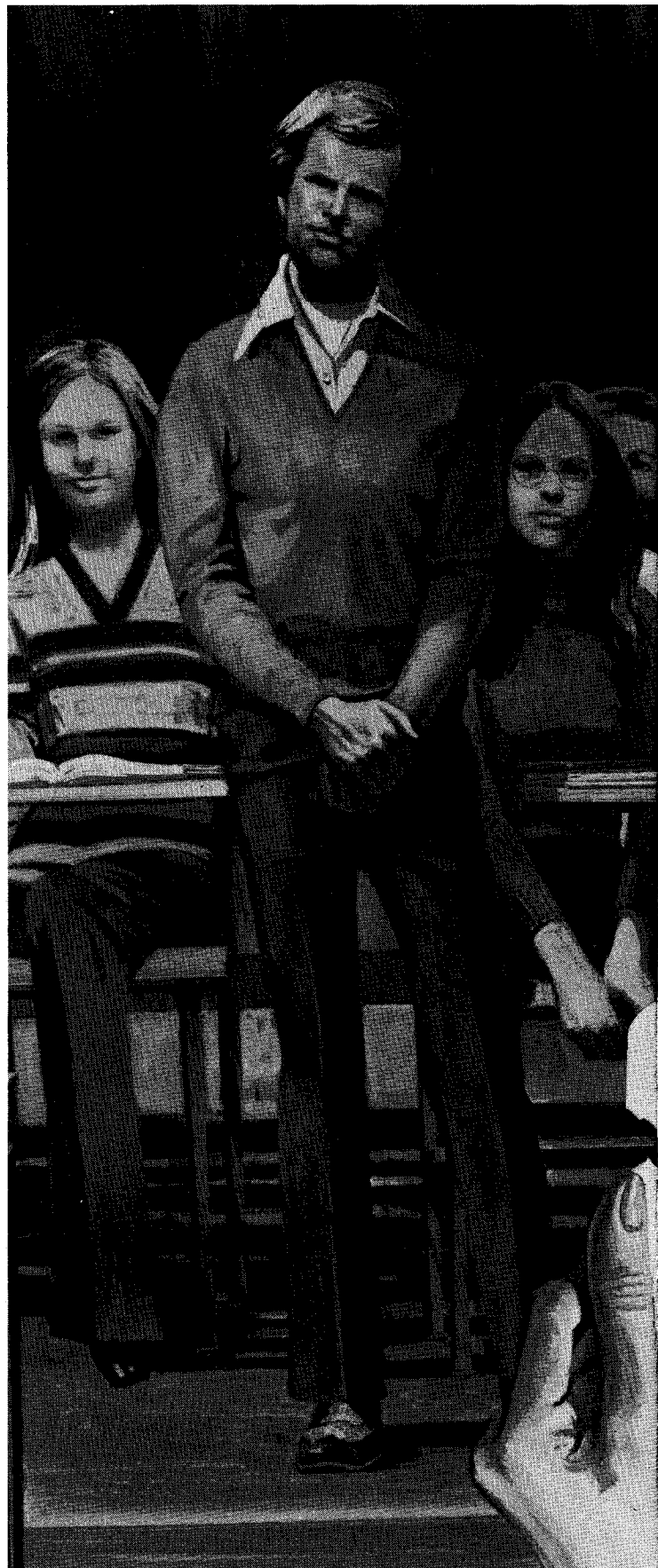
マットはその問題をはっきりと覚えていた。彼はにっこり笑うと次のように答えた。「それは、ジョセフ・スミスは予言者であって、予言者であると主張しているのではないからです。また、ジョセフ・スミスはモルモン経を翻訳したので、書いたわけではありません。」

「時間は好きなだけとってよいから、君たちモルモンを今のようにしたもの何なのか、前に来て私たちに話してくれないかね。」

マットは喜んでクラスみんなに教会について話をした。こうして彼の答えは認められたのであった。

私たちがその町に住んでいた時、子供たちは様々な機会をとらえて、他の人々に教会について話をしてきた。福音について友人たちに話す機会を毎日持つことは、子供たちにとって楽しみであった。

私たち家族の伝道ぶりを説明するなら、自然にという言葉ほど最適なものはないだろう。ただ「自然」の機会を大切にすればよい。無理に行なう必要はないのである。見る目と聴く耳を持ち、心を常に開いていただきたい。そうすれば、主と主の教会について話す機会を数多く持つであろう。



私たちは子供たちに、彼らの務めはすべての人々を改宗させることではないことを、はっきり理解させようとした。子供たちには、教会のことをすべての人々に自然に教える機会と特権が与えられているのである。

私たちは快活で好意的で、教会の標準を守るならば、福音に関する事柄を話題にして話ができることを知っていた。人を強いて改宗させようとする、やがて自分が威圧的になっていることに気付くであろう。そうした行為は非常に不自然である。

例えば、長男に高校の卒業式で話す機会が与えられた時のことである。息子は初め、教会についてたくさんのお話を話そうと思った。しかし、式に列席する人々の宗派は様々であるため、教会について話すことは不自然であるように思えた。

そこで、彼は次のような言葉でごく自然に話を結んだ。「私が3年前この高校に入学した時、だれひとりとして知っている人はいませんでした。私はほかの土地から来たのです。でも今、私の心は皆さんとの楽しい思い出で満ちあふれています。皆さんの親切や友情によって、私はこの町とこの町の素晴らしい人々を愛するようになりました。この町は私のふるさととなり、この学校は私の母校となりました。私にこのような気持ちを抱かせて下さった皆さんに、ひとつの言葉を引用して私の気持ちを述べたいと思います。それは、『まさにこの地だ』という言葉です。これは偉大なモルモンの予言者が、かつて西部において新しいふるさととなる地を見つけた時に言った言葉です。そして私に関して言うならば、『まさにこの地』この町こそが私のふるさとです。」

人々は立ち上がると、しばらくの間、拍手がっさいした。息子の自然で非の打ち所のない誠実な思いは、列席者の心を捕え、多くの人々の心の扉を開いたのである。

友好的でしかも幸福な人生を送っていても、そのこと自体が、数学の教師が生徒に代数を教えるように教会の教義を人々に教えるはしないことは、もちろんである。

しかし、友好的な人は友人との自然な会話の門戸を開き、宣教師との集会を持てるように助けることができる。

私たちは家族でよく旅行をし、たびたび喫茶店で食事をした。ウェイトレスがコーヒーを運んで来ると、私たちは「コーヒーは飲みませんので結構です。私たちはモルモンなんです」と自然に答えた。

「私たちはモルモンです」という言葉は、ごく自然に、容易に、言うことができる。話が弾んでくると、やがて住所を聞き、宣教師が訪問できるように手はずを調える。

私たちは子供たちに、人々から声をかけられるような親切な人にならなければならないと教えた。また、ある人から教会についていろいろ問われても、それは必ずしも私たちに對する非難であると考えてはならないことを告げた。私たちの信条が批判されても、怒ってはならない。論争したり、横柄な態度をとったりせず、笑顔で答えなければならない。彼らはただ理解していないだけのことであるこ

とを、私たちは知る必要がある。

私たちが引越した東部の町には、モルモンはごくわずかししか住んでいなかった。そこで私たちは、わが家でパーティーを開いて近所の人々を全員招いた。それ程大勢は来ないだろうという予期に反して、招待した人はすべて来てくれた。そのために、わが家は招待客で一杯になった。ところが、彼らがお互いに顔を合わせたのは、その時が初めてだということであった。

パーティーは遅くまで続いた。やがて一家族を残し、彼らはそれぞれ帰宅した。残った家族はカトリック教徒であり、私たちの家から道を下った所に住んでいた。また、その子供たちは私たちの子供たちと同じ年齢であった。そのパーティーは、彼らと友情を深めるきっかけとなった。彼らの子供たちはわが家に来て、息子たちはバスケットを、娘たちはかくれんぼをして遊んだ。

暑い夏の夜、子供たちが一緒に遊んでいる間、私たち両親は共にホテルを眺めたり、いろいろなことについて談笑した。友情が深まってくると、彼らはこのように尋ねてきた。「お宅のお子さんたちは、とても適応性があり、やさしいですが、どのようにしてしつけたのですか。」「ほとんどは教会や家庭の夕べで教えます。初等協会でもいろいろなことを学んでいきますよ」と私たちは答えた。すると彼らは、「うちの子供たちも是非、お宅のお子さんのようにしたいですわ」と言った。

私たちは彼らを家庭の夕べに招待した。彼らも私たちを招待してくれた。しかし、それですべてが終わったわけではない。もっとしなければならぬことがあった。そこで私たちは宣教師をわが家に招き、その家族をも招待した。

彼らの子供たちは宣教師が本当に好きになり、「僕たちの家に来て、教会について話してよ」と宣教師に頼んだ。そこで宣教師たちはその家庭を訪問することにした。ところが両親は、「教会について私たちにお話したいとおっしゃるんですか」と言った程度の関心しかなかった。こうして、宣教師は私たちの教会について話した。けれども彼らはカトリック教会に強く固執し、改宗しようとしなかった。その町を去る時に一番寂しかったことは、愛するその家族に別れを告げることであった。今年の夏、その家族の子供たちがユタに住むわが家の息子たちに会いにきた。これからもまた来ることだろう。

教会員の中には、伝道活動を喜んで行なう人もいれば、それを重荷に感じ、人々に強要したくないと思う人もいる。しかし、わが家の子供たちはだれにも強いることなく、教会についてごく自然に話してきたように思う。こうすると、すべての人とは言わないが、多くの人が私たちの教会に関心を示すことだろう。関心がありそうな人には、宣教師を紹介することができる。私たちの経験からして一番難しいことは、「宣教師に御家庭を訪問してもらいましょうか。彼らとお話しになりますか」と聞くことであった。しかしそれでも、あなたの好きな人、あるいは愛している人ならば、自然に行なえることだろう。

教 会員でない人に教会への興味を持たせるにはどうすればよいだろうか。この質問には、様々なよい答えが返ってくることだろう。だが、最も効果的な方法はどれだろうか。最近改宗した数名の人々にこの質問を試してみた。彼らの話や熱意、またアイデアから、会員の伝道活動を進める上で役立つ何かを学べるものと思う。

「伝道ですか？」肩まである長くきれいな黒髪の17歳の少女スアン・ヤッツィーはにっこりと笑った。スアンはニューメキシコ州のシップロック出身のナバホ・インディアンである。彼女は目を輝かせてこう言った。「教会に興味をもたせる最も良い方法は、その人と友達になることです。」

スアンが教会員になったのは2年前のことである。彼女はその改宗の模様を次のように語ってくれた。「末日聖徒イエス・キリスト教会に入る前から、私たちはこの世を去ると、私たちよりも先に亡くなった友人や親戚の人々に会えると信じていました。ですから、私の通っていた教会の牧師さんから、『死んだ後に先祖に会えるという考えは間違っている』と言われた時、私はその教会を信じられなくなっ

てしまいました。そこで私はどの教会が真実か主に尋ねました。そして主が祈りに答えて下さるならば、戒めを守ると約束したのです。」

スアンはインディアン保留地外の高等学校に入りたかった。それでユタ州リッチフィールドのインディアン教育プログラムに参加を勧められた時、すぐにそれを承諾した。リッチフィールドではインディアンの生徒たちは皆、寄宿舎に住み、地元の学校に通学していた。

寄宿舎で働いている人がスアンとほかに数人の友達を家庭の夕べに招待してくれたが、スアンは別に行きたいと思わなかった。「当時、私はモルモン教会についてよく知りませんでしたし、好きになれるかどうかわからなかったんです。でも、友達に誘われるままに行ってみました。けれども、私はすぐに教会に興味を覚えました。そこで聞いたことがとても素晴らしかったからです。」

しばらくして、私がモルモン経を続んで見ると、何となく聞いたことのある話があちこちにあるんです。私がまだ子供の頃、祖母は私にいろいろなナバホの伝説を話してくれました。そして、大いなる白い神がいつか帰って来られ

会員の伝道

レアード・ロバーツ



る話を祖母から聞いたのでした。」

スアンはこの福音をできるだけ多くの人々と分かち合いたいと思った。つい最近も、親友のエロウイズ・マイルズが宣教師のレッスンを終えて、バプテスマを受けたばかりである。その時のことをスアンはこう述懐していた。「監督に親友を連れて来るって約束したんです。それでエロウイズを連れて行ったのです。もちろん、エロウイズは教会についてもほとんど知りませんでした。私たちが監督を待っていると、丁度そこに宣教師が通りかかりました。そこで私は彼らに今晚約束があるかどうか尋ねました。すると『ない』という返事なので、それでは私の友達を教えて下さいと言って、約束したんです。」

マサチューセッツ州スプリングフィールドのディビッド・ウォフナー（22歳）の場合も、友情が彼の改宗の大きな助けになっている。

現在、ユタ州ソルトレーク伝道部で宣教師として働いているウォフナー長老は、伝道における友情の果たす役割について次のように述べている。

「私は高校を卒業した時、家を出て働こうと決心しました。そしてバージニア州に仕事を見つけ、親しい友人と一緒にそこに住むことになりました。その時のルームメイトの中に、モルモンがいたのです。私たちはすぐによい友達になりました。何でも一緒にし、何でも話し合うようになりました。彼はいつも心から私に思いやりを示してくれました。つまり、きっかけは友達だったのです。多分友達になる以上に大切なことはないと思いますよ。」ウォフナー長老はこう言っていた。

「それから彼は私をヤングアダルトの活動に招待してくれました。そしてみんな私を歓迎してくれました。初めての私と知り合えたことを心から喜んでいました。みんな、私がこれまで付き合ってきた友達と違っていました。雰囲気は全く違うんです。」

私が活動に参加し教会の集会にも出席するようになると、会員たちはいつも私を尊敬し、大切に扱ってくれました。そして、だれも私がほかの教会の会員だからと言ってのけ者にするようなことはありません。こうして私は、いつも彼らといることが楽しくなってきました。」

ウォフナー長老はそれでもまだバプテスマを受けるといふ決心はつかなかったようである。

「マサチューセッツ州から一緒に来た親友（彼も一緒に住んでいた）もレッスンを受け、彼の方はほとんどバプテスマを受けるばかりになっていました。でも私は宣教師が来ると、何とか理由をつけて抜け出していました。私の障害は、何が起るかわからないことからくる恐れだけでした。すでに主に仕える決心はしていたのですが、ただ時間が必要だったのです。そんな煮え切らない私でしたが、だれもそれをとがめたりはしませんでした。友達も辛抱強く私を見守り、いつもよい友達でいてくれました。そんなことがあってようやくバプテスマを受けると決心がついたのです。」

常に誠実であることは、伝道活動の最も大切な要素では

ないでしょうか。もし皆さんが誠意を持って人に接し、真の友達となるならば、その人は必ず福音に心を向けるはずです。教会員にとって大切なのは、教義を教えることよりも、種を蒔くことだと思います。良い模範を示すことも大切です。自分だけが福音の原則に従って生活をしていても十分ではないのです。出かけて行って、福音に従う生活の良さを人々に示すべきだと思います。自分がモルモンであることを恐れず人々に知らせるべきではないでしょうか。私は自分がモルモンであることを人に話せるのを大きな喜びとしています。」

忍耐も伝道活動に欠くことのできない要素である。シンディー・ドクスター（15歳）とその妹のティナ（14歳）も、バプテスマを受ける前に2年ほど教会の活動に参加していた。シンディーは、モルモンの家庭が親切であることや、友達が連れて行ってくれた活動の素晴らしさに感動した。しかし、バプテスマを受けると決心はつかなかった。

「教会の会員たちは私たちをそのまま受け入れてくれました。別にああしなさいとも、こうしなさいとも言われませんでした。それがとてもよかったんです。」友達も温かく見守ってくれ、ある時、そのうちのひとりから、「どう、宣教師のレッスンを受けてみない？」と言われたシンディーは即座に「はい」と答えたのだった。シンディーとティナは、友達や学校の科学の先生に励まされ、ついに今年になってバプテスマを受けた。しかも彼らにバプテスマを施したのは、科学の先生のラリー・アンダーソン兄弟だった。

アイダホ州ケロッグのバイオレット・ウィルソン（18歳）も、教会の活動に数年間参加してから教会に入ったひとりである。彼女は、自分が教会に入る気持ちになった一番大きな理由は、教会員が自分を仲間として扱ってくれたからですと言っている。

クレグ・ロジャーズ（21歳）は伝道活動についてこう述べている。「人々を感化する一番良い方法は、自分が信じている通りの生活をすることです。ありのままの自分を示すようにし、人に見せるために自分を飾るようなことがあってはならないと思います。私をこの教会に導いてくれたのは、そういう正直な生活をしている人々でした。彼らにとっても感謝しています。そして、私も同じようにできればと思っています。人に福音への関心を持たせようとする時に何十回となく失敗するかもしれません。しかし、1回でも成功すればそれで十分に価値があると思います。私を助けてくれた人々も、多分何回も失敗したと思います。」

本当の友達になること、相手の価値や信念を尊重すること、忍耐をもって見守ること、自分のありのままを出すこと、良い模範を示すこと、会員同士が閥を作って非教会員を受け入れず、締め出したりしないこと、これらは最近改宗した人々が会員の伝道活動をより効果的に行なうために提案する幾つかの方法である。

最後にスアン・ヤッツィーは伝道についてこう述べていた。

「伝道ですか？とにかく行なうことです。」

モルモン経の詩

作・阪本晴子

(一) 神はニーファイ助けしも
末なる輩はレーマンに
まさるも劣らぬ悪漢に
なり変りたる現今なれば
我モルモンが祈りても
神の御護りあるべきや

(六) レーマン・ユダヤ・異邦人の
末に至れる子等のため
神に近づく道しるべ
数々まとめ彫り書きぬ
モロナイ クモラに運び込み
遂に委ねぬ神の手に

(二) 愛子モロナイ手招きて
我等は神に仕うる身
たとえかばねは、さらすとも
如何で魂けがすべき
汝と別る、この際に
伝えおかまし、我が使命

(七) ヨセフの末なるヨセフの子
何れが正しき御教と
神に伺う心音に
モロナイはたと喜びて
これぞ待ちにし若人よ
今より彼を見守らん

(三) 常々語りしニーファイや
聖き人々、受継ぎて
刻み伝えし、歴史の版
約め書きせし我なるも
今は汝しに手渡さん
神の御心傳ふべし、

(八) あたりまばゆき光みて
ヨセフは御許にかしこみぬ
モロナイ奇しき神の旨
三度一夜に繰り返す
ヨセフは父に告げんとて
夜明けを待ちて立ち出でぬ

(四) モロナイ深く、うなずきて
差し出す双手に力みつ
父の仰せに従いて
我モロナイも刻み継がん
戦烈しき時期なれど
見事守りて相果てん

(九) 言葉たがえず年々に
モロナイ彼を訪れぬ
やがて四年は廻り来て
クモラの丘より取り出せり
奇しき業は始まらん
神の御業は始まらん

(五) 昼は草かげ蔽の内
夜は籠りて刻みつ、
神の御声に打ち震う
いまだ生命のあるを知り
父の執念を鎮めんと
イテルの歴史に想い馳す

(十) ヨセフはウリムとトンミムに
たよりて版を訳したり
浸めの儀式神権の
正しき知識授りて、
こゝに建てたり神の宮
我等の集う神の宮

青葉茂れる桜井の

落合直文 作詞
奥山朝恭 作曲

♩ = 114

あーおばしげれる さくらのの さーとのわたりの
ゆうまぐれ このしたかーげに こまとめて
よのゆくすーえをつくづく と しーのぶよるいの
そでのえに ちーるはなみだか はたつゆか

日本人初の教会幹部召される



菊地良彦長老御夫妻

10月1日(土)、2日(日)の両日、ユタ州ソルトレーク・シティーのテンプルスクエアのタバナクルで、予言者スペンサー・W・キンボール大管長の管理の下に、第147回半期総大会が盛大に催された。そして、初日の午前の一般大会で、七十人第一定員会会員として3名の教会幹部が召された。今回の大会で特筆すべきことは、菊地良彦長老が日本人として初めて教会幹部に召されたことであろう。

以下に掲載するのは、10月1日発行の「チャーチニューズ」の記事の抜粋である。

「大管長会は、3名の兄弟すなわち合衆国の前伝道部長、ドイツの地区代表、日本のステーク部長を、七十人第一定員会会員として召すことを発表した。

この召しは、10月1日に開かれた第147回半期総大会の最初の一般大会で会衆に発表されたものである。今回この召しを受けたのは、ソルトレーク・シティー在住のヒュー・ウォーレス・ピノック長老、ドイツのドルトムント在住のR・エンツィオ・ブッシャ長老、ならびに日本の東京在住の菊地良彦長老の3名である。

この新たな召しによって、七十人第一定員会の人数は、合計44名となった。……

菊地長老は、1974年10月以来、日本東京ステーク部の部長を務めており、その前の責任は、ステーク部長会の第一副ステーク部長であった。

長老は、1941年7月25日、日本北海道室蘭市で菊地初雄、コヨ夫妻の間に生まれ、1964年8月24日、越谷登志子姉妹と結婚した。

また長老は、1969年に日本伝道部の第二副伝道部長に召されている。それまでの責任は東京西支部(現在の東京第3ワード部)の支部長であった。

さらに、北部極東伝道部における専任宣教師、その後1年間の建築宣教師の経験もある。

長老の出身校は亜細亜大学で、現在、日本のレナウエア支社のセールスマネージャーを務めている。」「(「チャーチニューズ」1977年10月1日 より)

◇お詫び訂正◇

聖徒の道9月号に下記の誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。
p.394, 3段目上から7行目およびp.396,1段目上から5行目の「コロンビア時代」を「コロンブス以前の時代」に訂正いたします。